桜ヶ岡公園遺跡

一第2次調查報告書一

2007年12月

仙台市教育委員会

桜ヶ岡公園遺跡

一第2次調查報告書一

2007年12月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃から多大なご理解、ご協力を賜り、感謝申 し上げます。

さて、桜ヶ岡公園(西公園)は、春のお花見や夏の花火大会をはじめとして、四季折々市民の皆様に親しまれている公園です。しかし、公園内の各施設は老朽化が激しく、また、地下鉄東西線の(仮称)西公園駅が公園の一角に建設されることなどから、公園全体の見直しを図り、より一層皆様に愛される公園を目指して、平成19年度から平成28年度にかけて段階的に再整備を行うこととなりました。

桜ヶ岡公園は、その一部が桜ヶ岡公園遺跡となっています。したがって、平成19年度の 西公園再整備事業に先立ち、遺構確認調査を行いました。桜ヶ岡公園遺跡は平成18年度に 新たに登録された遺跡ですが、今回の発掘調査によって武家屋敷の様子を知るうえで貴重 な資料を得ることができました。

先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、現代に生きる私たちの大きな責務であると考えております。仙台市教育委員会では、今後とも、文化財の保護と活用に取り組んでいく所存であります。引き続き皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際しまして、ご協力ください ました皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成19年12月

仙台市教育委員会 教育長 **荒井** 崇

例 言

- 1. 本書は、西公園再整備事業に伴う埋蔵文化財の確認調査報告書である。
- 2. 発掘調査は、仙台市教育委員会の指導のもとに、株式会社玉川文化財研究所が行った。
- 3. 本書の作成及び編集は、仙台市教育委員会文化財課廣瀬真理子、株式会社玉川文化財研究所中山 豊が行った。
- 4. 本書の執筆は、廣瀬真理子の責任のもとに下記の通り行った。

第 1 章第 2 節 · · · · · · · · · · · · · · · · 廣瀬真理子 · 中山 豊

第 Ⅰ 章第 1 · 3 節、第 Ⅱ 章、第 Ⅲ 章 · · · · · · · · · 中山 豊

- 5. 調査と報告書作成にあたり、仙台市建設局百年の杜推進部公園課、国際航業株式会社竹内俊之氏、守谷健吾氏、陶磁器類については仙台市教育委員会佐藤 洋氏、『安政補正改革仙府絵図』の使用にあたっては今野印刷株式会社のご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。
- 6. 調査及び報告書作成に関する諸記録、出土遺物等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

- 1. 土層注記に記載している土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原 1977) に基づいて認定した。
- 2. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1:25,000『仙台西北部』の一部を使用している。また、調査区位置図は建設局百年の杜推進部公園課提供の図面を基に作図した。
- 3. 調査の際の平面座標基準は、世界測地系平面座標第X系を基にしている。
- 4. 本書に使用した遺構挿図縮尺は、調査区配置図1/1,000、トレンチ平面図・断面図1/60である。
- 5. 本書に使用した遺物挿図縮尺は $1/3 \cdot 2/3$ 、遺物図版縮尺は1/4(図版 $5-41\sim62$) · 1/3(図版 $4-1\sim10 \cdot 18$ ~30 、図版 $5-31\sim40$) · 2/3(図版 $4-11\sim17$)である。
- 6. 遺物の登録は種別ごとに行い、番号の前に以下のような略号を付している。

F: 軒丸瓦・丸瓦 H: その他の瓦 I: 陶器・土師質土器 (ロクロ使用)・瓦質土器 J: 磁器

N:金属製品 P:土製品

7. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

SK: 土坑 SD: 溝跡 SX: 性格不明遺構 P: ピット

本文目次

序文					
例 言·	凡例				
第Ⅰ章	調査の概	既要	1	第Ⅲ章 まとめ	· 24
	第1節	調査要項	1	写真図版	· 27
	第2節	調査に至る経緯と経過	1	報告書抄録	未
	第3節	遺跡の概観	2		
第Ⅱ章	調査の原		4		
	第1節	基本層序	4		
	第2節	各調査区の遺構と遺物	7		

第1章 調査の概要

第1節 調查要項

1 遺跡名称 桜ヶ岡公園遺跡(宮城県遺跡番号01562)

2 所 在 地 宮城県仙台市青葉区桜ヶ岡公園地内

3 調査原因 西公園再整備事業に伴う埋蔵文化財の確認調査

4 調査主体 仙台市教育委員会(生涯学習部文化財課)

5 調 査 担 当 調査係主査 原河英二

調査係主事 廣瀬真理子

調查員中山豊(株式会社玉川文化財研究所)

6 調査期間 平成19年8月20日~平成19年9月27日

7 調査面積 調査対象面積 270㎡

実調査面積 約171 m²

第2節 調査に至る経緯と経過

今回の発掘調査は、宮城県仙台市青葉区桜ヶ岡公園地内に計画された西公園再整備事業に伴う事前調査として実施されたものである。仙台市建設局百年の杜推進部公園課では平成19年度から平成28年度にかけて、段階的に整備を進めることを予定している。今年度は、櫻岡大神宮北側のグラウンド部を中心に整備を行うこととなり、桜ヶ岡公園遺跡内であることから仙台市教育委員会と協議が持たれた。その結果、今年度は、遺構を保護したうえで整備を進めていくこととし、そのため調査は、遺構面の標高値を確認することを主目的として行うこととなった。

調査は、仙台市教育委員会の指導により、株式会社玉川文化財研究所(所長 戸田哲也)が行った。今年度の整備対象区域のうち、深く掘削する部分を中心に、約171㎡、計17ヶ所のトレンチを設定して実施した。トレンチの名称は、基本的に西から東に向かって算用数字を付して1~17Tとしている。

調査の経過は、まず重機による表土・攪乱層の掘削・除去を行い、その後人力による掘り下げと精査を実施した。 遺構確認が不明瞭な場合には一部を掘り下げて精査したが、確認調査が前提であったことから、遺構・土層の年代 や性格をある程度把握した時点までの精査にとどめた。また、本遺跡の土層は整地層を主体とするシルト系の土質 であったため、実際の調査にあたっては攪乱層の区別が非常に困難であったこともあり、部分的に明確な基盤層と 認定できる層位まで掘り抜いた箇所もある。調査では基準となる層と遺物の検出によって調査区間の土層対比が可 能となり、遺跡の基本層序を掴むことができた。

調査は、平成19年8月22日より、グラウンド部の調査区から掘削を開始した。翌日にはすべてのトレンチの掘削作業を終え、1トレンチから東へ順次精査を行った。精査後は各調査区とも写真撮影、平面測量、土層断面実測の各記録を作成した。調査にあたっては、近代以降の攪乱内に近世遺物が混入し、陶磁器類・瓦類に年代差を見出しにくいものもあったため、遺物類は極力取り上げることにした。その際、仙台空襲に関する遺物についても2トレンチを中心に採集している。現地作業は平成19年9月26日に仙台市教育委員会文化財課、仙台市建設局公園課との現地調査終了立会いを行い、翌27日に現場撤収と重機による埋め戻しを行って完了した。

現地撤収後は報告書刊行に向けて図面、遺物整理を開始した。

第3節 遺跡の概観

本遺跡は宮城県仙台市青葉区桜ヶ岡公園(西公園)内に所在し、JR東北本線仙台駅の西へ約1.7kmに位置する(第1図)。地形的には仙台城跡の東側を蛇行しながら南方向に流れる広瀬川中流域の左岸にあたり、中町段丘面の西端域に立地する。事業区域は櫻岡大神宮と国道48号線に挟まれた東西に長い約14,000㎡を測る桜ヶ岡公園の一画である。現況は東側がグラウンド、西側が散策できる広場となっている。

桜ヶ岡公園は明治8年(1875) に開園された。国道48号線以北は戦前に偕行社があった区域で、ここが公園の一部となったのは戦後である。グラウンド部には明治27年(1894) に立町から当地へ移転してきた立町小学校があったが(第2図、写真1:矢印部分)、昭和20年(1945) 7月10日の仙台空襲時に焼失した。隣接する櫻岡大神宮も明治5年(1872) に当地へ遷宮された神社で、当初は旧立町小学校西側の北部に鎮座していたが大正15年(1926) に現在地へ遷されている。当初の櫻岡大神宮南側に当たる区域には、明治8年(1875) に仙台城内から移植された臥竜梅(八房梅)が現在もその記念碑とともに健在である(仙台市歴史民俗資料館 2005)。

西側の広場には、明治29年(1896)9~12月の短期間に簡易商業学校跡があったとする記念碑が建立されているが、この場所は当時も公園として使われており、簡易商業学校は立町小学校内に設置されていたようである(渡邊・佐藤 2006)。その後、昭和3年(1928)に開催された東北産業博覧会では本公園が第二会場となり(渡邊編 2006)、この時建設された朝鮮館は特に注目を浴び、戦災を免れて昭和25年(1950)頃まで保存されていた。また、戦時下の公園は空襲に備えた避難所となり、櫻岡大神宮周辺に大小の防空壕が掘られていたことも証言されている(仙台「市民の手で作る戦災の記録」の会編 1973、同会ほか編 1995)。現在でも神社南西側の崖下には、閉塞された6基の防空壕が見られ、今回調査した2・3トレンチからは関連する可能性がある掘り込みを確認している。

近世の桜ヶ岡公園を含む広瀬川に沿った河岸段丘縁辺域は、武家屋敷となっていたことが絵図等で知られている。 その中でも今回の調査区域は、幕末まで亘理伊達家(伊達安房・伊達藤五郎)の屋敷地であったと推定される(第3 図)。亘理伊達家は仙台藩家臣団の中でも最高位となる一門の家格で、一門中二席に列せられる家臣だった(亘理町史編纂委員会 1990、仙台市史編さん委員会 2001)。二代藩主の忠宗以降、仙台の亘理屋敷では藩主参勤の際に門出の儀式を行うことが恒例となっていた(前掲 1990)。

これまで桜ヶ岡公園域は遺跡登録がなされていなかったが、平成16年に高速鉄道東西線建設事業に伴う(仮称) 西公園駅の隣接地70㎡が発掘調査された(斎野・澁谷・北原 2005)。その結果、近世の遺物が出土し調査区周辺に

近世の遺構が存在する可能性が示され、仙台市教育委員会は平成19年(2007)1月に遺跡登録を行った。この調査地点は本調査区域の南隣にあたり(第5図)、伊達氏の家紋の一つである三ッ引両(亘理町郷土資料館2002)を瓦当文様に持つ軒丸瓦が出土している。こうした平成16年の調査結果を受けて、桜ヶ岡公園内では高速鉄道東西線建設事業に伴う発掘調査が進行中であり、桜ヶ岡公園遺跡の具体的な様相が判明しつつある。

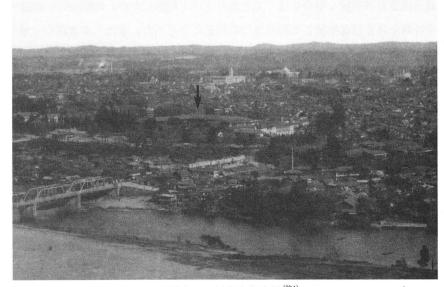
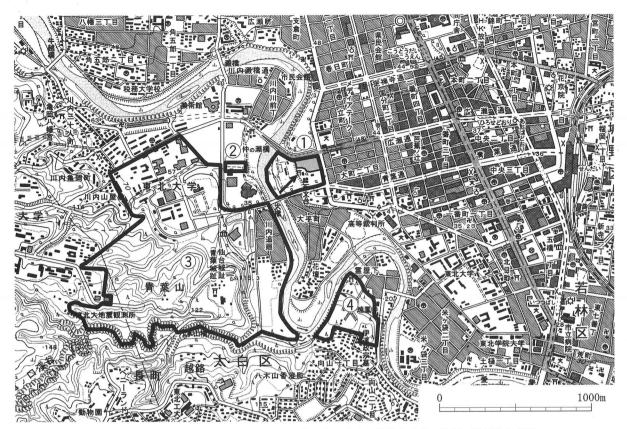
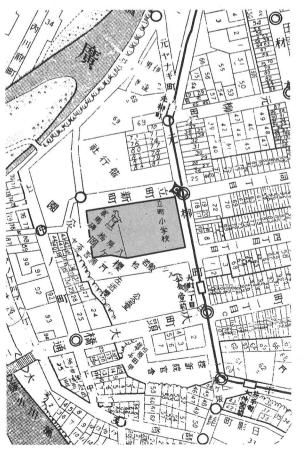


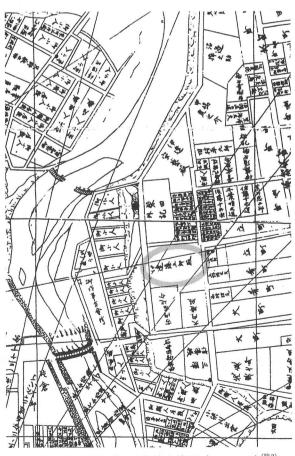
写真 1 仙台市街全景 (註1)



①桜ヶ岡公園遺跡(←ー今回調査区域) ②川内A遺跡 ③仙台城跡 ④経ヶ峯伊達家墓所 第1図 遺跡の位置図



第2図 地番入仙台市全図大正十五年度最新版(1926)^(註2) (は今回調査区域)



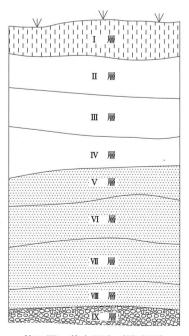
第3回 安政補正改革仙府絵図(1856~9)^(註3) (今回調査推定区域)

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 基本層序

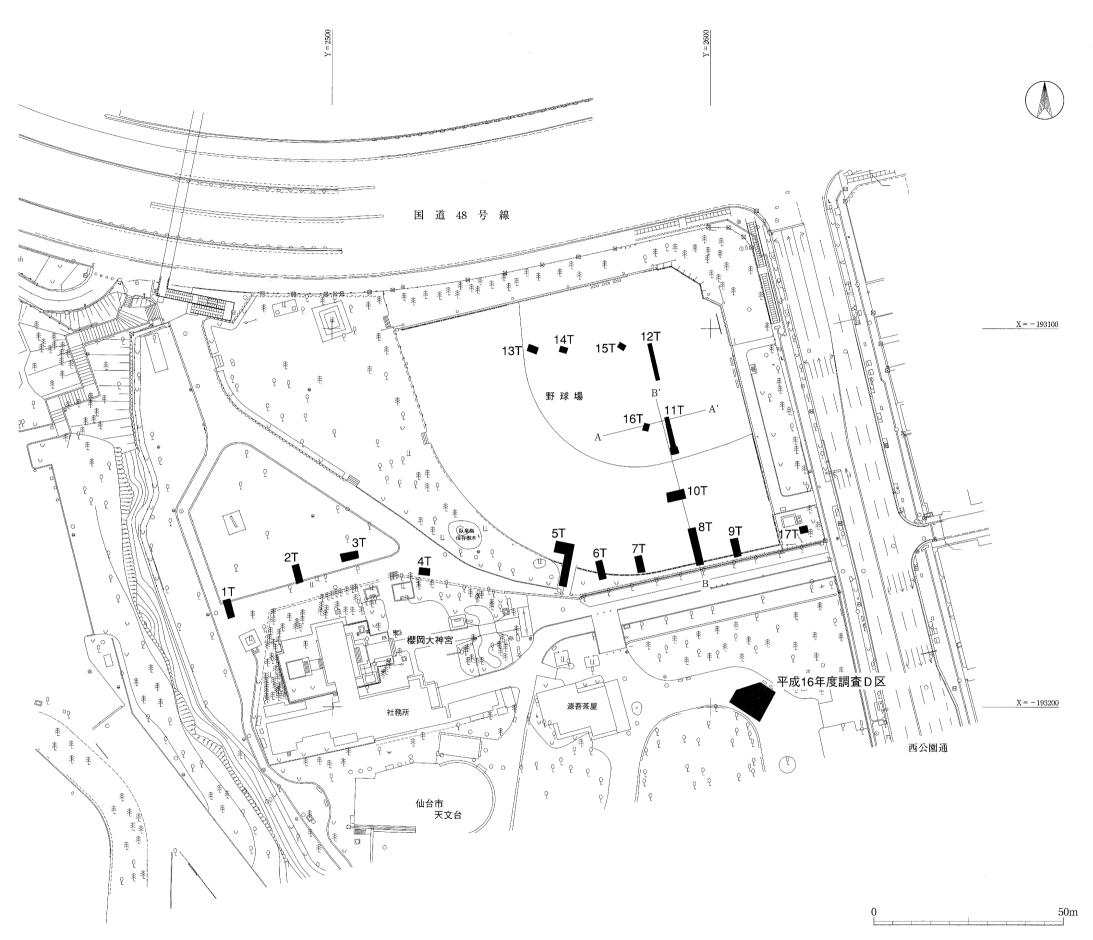
本遺跡の土層堆積は、総じて近代以降の攪乱が著しく認められる状態であった。各調査区とも狭い範囲であり、近世の出土遺物が少なかったことに加えてシルト質を基本とする土層となっていることから、土層の年代決定は困難であった。しかし、各調査区の表土(I層)直下からは焼土・瓦礫層が確認され、これが昭和20年(1945)7月10日未明の仙台空襲に関連する土層と考えられた。この瓦礫層を基準とすることによって、近代以前の土層を確定する手がかりが得られ、こうしたことからこの瓦礫層を攪乱層としてI層に一括せず、II層として層序区分することで近世遺物が出土する層位の把握が可能となった。ただし、II層は空襲以降の片づけ・整地による二次的な堆積層ともなっているため、現代のコンクリート塊を含む攪乱を覆っている箇所も認められた。

このように基本層序としては I 層からI 層が設定されたが、これらの層がすべて堆積する調査区はなかったことから、調査区間の土層比較を行って本遺跡の基本層序を柱状模式図(第 4 図)にまとめた。なお、 $II \sim IV$ 層の細分層については、調査区間対比が極めて困難な状態であったことから、調査区毎の細分として $II \sim IV$ に算用数字を付して層名称とし、調査区間で明らかに同一層に対比できる細分層名にはO内に算用数字を付した。また、 $II \cdot III$ 層は近代以降の土層であったが、近世層確認に際して重要となることから層序区分した。こうしたことから $II \cdot III$ 層に関連する攪乱層についてもローマ数字に算用数字を付して層名称としている。



第4図 基本層序(模式図)

- I層 表土層。現表土を a 層、グラウンド・公園の整備砂層を b 層とした。
- Ⅲ層 1945年(昭和20年)7月10日未明の仙台空襲に関連すると考えられる 瓦礫・焼土層。
- Ⅲ層 旧立町小学校の造成に関係すると考えられる整地砂層。
- IV層 近世の土層。
- V層 暗褐色粘質シルト。
- VI層 黒色粘質土シルト。黒褐色のa層と黒色のb層に細分した。
- Ⅵ層 漸移層
- ™層 黄色シルト。円礫を含まないa層と含むb層に細分した。
- IX層 黄褐色砂礫層。



第5図 調査区配置図(1:1,000)

第2節 各調査区の遺構と遺物

まず、遺構・掘り込みの層名に関する説明をしておきたい。 1トレンチSD1と3トレンチSX1は遺構名称を付けたが、調査の過程で近代以降の掘り込みと判明したものである。逆に、近世の掘り込みと判明したものに遺構名称を付さなかったものがある。それは大規模な遺構の中に狭い調査区が設定された可能性や、整地層と遺構堆積土の区別が判然としない等の理由からであり、その場合は層名のみを付けた。また、今回の調査は近世面の検出が目的であり、近代以降の掘り込みは攪乱として一括するべきだったが、前節でも述べたように近世層を把握する上で近代以降のII・II層の把握が重要であったことから、I層に含めずに層序区分した経緯があった。II層直下、II層直下から検出された攪乱に対して「攪乱」としてしまうと、土層断面図上II・II層との切り合い関係において整合性に欠ける表記となり、誤解を生じる恐れがある。こうしたことから、II層以下から確認された近代以降の掘り込みについても層名称を付すことにした。

以下、各調査区毎に遺構・遺物について述べるが、上述のように近世面の検出を目的としたことから、Ⅳ層の遺存状態やⅣ層までの深度についても述べることとした。また、図面についてはⅣ層以下の層をアミかけして示した。

1トレンチ (第6図、図版1-4)

 $5.0 \times 2.0 \text{m}$ (10.0m^2) 、N層上面までの深度は42 cmを測る。N層は調査区の北半で確認され、遺存状態は良好である。N層直下はN層となっている。なお、調査区の南半は近代以降のSD1によって攪乱されていた。

2トレンチ (第6図、図版1-5)

 $5.0 \times 2.0 \text{m}$ (10.0m^2) 、 \mathbb{N} 層上面までの深度は53 cmを測る。本調査区は全体が近代以降の攪乱となっており、 \mathbb{N} 層は調査区の北端で確認されたに過ぎない。

3 トレンチ (第 7 図、図版 1 - 6)

 $5.0 \times 2.0 \text{m}$ (10.0 m)、N層上面までの深度は28 cmを測る。N層は調査区のほぼ全域で確認され、調査区の西端は近代以降のSX1によって攪乱されているが、総じて良好な状態である。 $SX2 \cdot 3$ はサブトレンチ調査を行い、いずれも浅い落ち込みでSX3 (古) $\rightarrow SX2$ (新) の切り合い関係を確認した。SX2 からは近世の中国磁器小片と銅銭各1点がそれぞれ1層、2層から出土している。

4トレンチ(第7図、図版1-7)

 $3.0 \times 2.0 \text{m}$ (6.0 m)、 \mathbb{N} 層上面までの深度は24 cm を測る。 \mathbb{N} 層は調査区の全域で確認され、層厚は約 $20 \sim 30 \text{cm}$ を測り他の調査区に比べて薄いが、遺存状態は良好である。 \mathbb{N} 層 $_{-}$ 「「で検出した調査区東端のSX1で5 層から平瓦片 1 点が出土している。なお、本調査区では南側を \mathbb{N} 層上面まで掘り下げ、 \mathbb{N} 層以下に良好な \mathbb{N} 0 土層堆積を確認した。

5トレンチ(第8図、図版1-8)

11.5×2.0m(23.0㎡)に3.0×3.0m(9.0㎡)の拡張区を加えた調査区である(計32.0㎡)。 \mathbb{N} 層上面までの深度は36cmを測る。 \mathbb{N} 層は調査区のほぼ全域で確認され、北東端に著しい攪乱が認められるが、遺存状態は総じて良好である。本調査区の北側を \mathbb{N} 層上面まで掘り下げた結果、拡張区の南西側で \mathbb{N} 層以下に良好な \mathbb{N} 0~ \mathbb{N} 8の土層堆積を確認した。なお、攪乱からの出土であったが接合により残存率約1/3となった中国青花皿が出土している。

6 トレンチ (第9図、図版2-1)

 $5.0 \times 2.0 \text{m}$ (10.0m^2) 、 \mathbb{N} 層上面までの深度は12 cmを測る。 \mathbb{N} 層は調査区のほぼ全域で確認され、調査区の南端と北側に近代以降の攪乱が認められたが、遺存状態は総じて良好である。本調査区の南側では \mathbb{N} 層直下に \mathbb{N} 層を検出したが、この \mathbb{N} 層を掘り込んだ \mathbb{N} 層の堆積を確認した。また、北側からは近代以降に掘り込まれた溝状の \mathbb{N} 名

(Ⅱ1~3層)が検出されている。

7 トレンチ (第 9 図、図版 2 - 2)

 $5.0 \times 2.0 \text{m}$ (10.0m^2) 、 \mathbb{N} 層上面までの深度は33 cmを測る。 \mathbb{N} 層は調査区のほぼ全域で確認され、南端と北端に近代の攪乱が認められたが、遺存状態は総じて良好である。

8 トレンチ (第10図、図版 2 - 3 ~ 5)

 $10.0 \times 2.0 \,\mathrm{m}$ ($20.0 \,\mathrm{m}^2$)、 \mathbb{N} 層上面までの深度は $17 \,\mathrm{cm}$ を測る。 \mathbb{N} 層は調査区の全域で確認され、調査区の南端と中央西側に近代以降の攪乱が認められたが、遺存状態は総じて良好である。本トレンチからは南側の \mathbb{N} 3 層直下に \mathbb{N} \mathbb{N}

9トレンチ (第11図、図版2-6)

 $5.0 \times 2.0 \text{m}$ (10.0m^2) 、 \mathbb{N} 層上面までの深度は16 cmを測る。 \mathbb{N} 層は調査区のほぼ全域で確認され、南半に近代以降の攪乱が認められたが、総じて良好な遺存状態である。

10トレンチ (第11図、図版 2 - 7)

5.0×2.5m(12.5m²)、IV層上面までの深度は29cmを測る。IV層は調査区の中央より東側で確認され、遺存状態は良好である。調査区の西側には近代以降の攪乱が認められた。

11トレンチ (第12図、図版 2 - 8 ~ 図版 3 - 2)

 $10.0 \times 1.2 \text{m}$ (12.0 m)、 \mathbb{N} 層上面までの深度は37 cmを測る。 \mathbb{N} 層は調査区のほぼ全域で確認され、南端部に近代以降の攪乱が認められたが、遺存状態は良好である。 \mathbb{N} 層上面からは部分的に礫の集中が認められ、比較的大きな円礫が認められた北半を約10 cm掘り下げたところ、北から近世の礎石(P1)と柱穴状のプラン(P2)、及び礫集中部が検出され、陶磁器類の破片や銅銭等が出土した。また、これらの東側には重複した遺構状のプランも確認した。

12トレンチ (第12図、図版3-3)

 $10.0 \times 1.1 \text{m}$ (11.0 m)、 \mathbb{N} 層上面までの深度は30 cmを測る。 \mathbb{N} 層は調査区の全域で確認され、良好な遺存状態である。中央より北側の \mathbb{N} 層上面で部分的な礫集中の上端部が認められた。

13トレンチ (第13図、図版3-4)

 $2.7 \times 1.8 \text{m}$ (4.86 m)、 \mathbb{N} 層上面までの深度は34 cmを測る。本調査区は全体が近代以降の攪乱となっており、 \mathbb{N} 層は調査区の北端で確認されたに過ぎないが、南壁西側では良好な \mathbb{N} \mathbb{N} で \mathbb{N} で \mathbb{N} の \mathbb{N} となっており、 \mathbb{N} の \mathbb{N} となっており、 \mathbb{N} の \mathbb{N} の \mathbb{N} を \mathbb{N} の \mathbb{N} の \mathbb{N} を \mathbb{N} を \mathbb{N} の \mathbb{N} を \mathbb{N} を \mathbb{N} の \mathbb{N} を \mathbb{N} の \mathbb{N} を \mathbb{N} の \mathbb{N} を \mathbb{N} の \mathbb{N} を \mathbb{N} を \mathbb{N} の \mathbb{N} を \mathbb{N} を \mathbb{N} を \mathbb{N} を \mathbb{N} を \mathbb{N} の \mathbb{N} を \mathbb{N} を

14トレンチ (第13図、図版3-5)

 $2.0 \times 1.5 \text{m}$ (3.0 m)、 \mathbb{N} 層上面までの深度は34 cmを測る。 \mathbb{N} 層は調査区の中央より東側で確認され、南西側と中央、北東端に近代以降の攪乱が認められるが、遺存状態は総じて良好である。東壁南側と北西端の \mathbb{N} 1 層上面からは、 \mathbb{N} 1 で 2 が検出された。出土遺物は無いが、近世の建物跡に関わる遺構と考えられる。

15トレンチ (第13図、図版3-6)

 $2.0 \times 1.5 \text{m} (3.0 \,\text{m}^2)$ 、 \mathbb{N} 層上面までの深度は38 cmを測る。 \mathbb{N} 層は調査区のほぼ全域で確認され、北端に近代以降の攪乱が認められるが、遺存状態は良好である。北壁に沿った状態で北西端に向かって延びるプランが \mathbb{N} 7 層上面で確認されたため、その東側を掘り下げたところ、垂直に立ち上がる掘り込みの壁が検出され、陶磁器類の破片や銅銭、金具類、焼礫等が出土した。さらにその東側を掘り下げた結果、黄色粘土質シルトを主体とする整地層と考えられる土層 (\mathbb{N} 5 層)を確認し、南東端から礎石状の礫集中が検出したところで掘り下げを中止した。

16トレンチ (第13図、図版3-7)

 $2.0 \times 1.5 \text{m}$ (3.0 m)、 \mathbb{N} 層上面までの深度は31 cmを測る。 \mathbb{N} 層は調査区の全域で確認され、遺存状態は良好である。遺構としては北西端の \mathbb{N} 1層上面から、礎石跡 (P1) を検出した。P1の上位には礎石と考えられる大形礫が検出されたが、攪乱内の出土であったことから除去した。なお、本遺構は11トレンチP1と同様に円礫と粗い砂の充填が認められた。

17トレンチ (第14図、図版3-8)

各トレンチの出土遺物 (第1・2表)

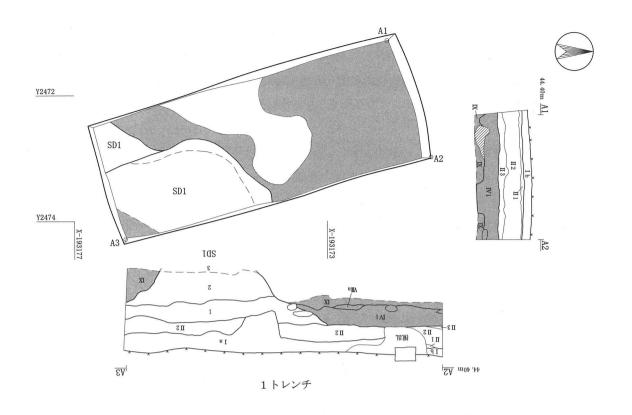
遺物はコンテナにして13箱が出土した。その内容と点数を第 $1\cdot 2$ 表に示し、表に基づいて若干の説明を加える。第1表は \mathbbm{I} 層を中心とする \mathbbm{I} ~ \mathbbm{I} 層出土遺物である。明確な近世遺物は除いたが、鉄製品については近世まで遡る可能性のある角釘状のものも含めた。主な遺物としては、2トレンチに「彎」と「馬」の一部と見られる刻印を持つ相馬焼碗 2点がある。また、14トレンチの洋瓦には1924年以降の「日本洋瓦」の刻印が認められ、2トレンチの煉瓦には「 $\mathbb O$ 」の刻印を持つものが1点ある。なお、ガラスは戦災時の高熱によって溶解・変形したと考えられる小片が主体をなし、スレートは大形破片の形状と2ヶ所の穿孔及び加工状態から石盤ではなく瓦と考えた。

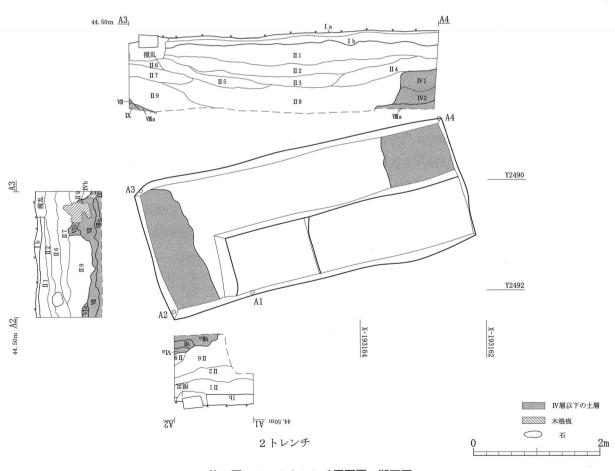
第2表はIV層を中心とする出土遺物で、近代との区別が困難な瓦類のすべてと中世陶器1点を含めた。陶磁器類は小片を中心とするが16世紀末~17世紀前半の中国青花皿片を最古とし、19世紀(幕末~明治期)のものまでが出土している。主体は18世紀以降で、調査したIV層の年代を示すものと考えられる。製品としては肥前陶磁器を中心として瀬戸・美濃陶磁器が見られ、大堀・小野相馬焼に少数ながら岸系、堤の陶器が加わる(佐藤 2002・2004)。中国製品は明末~清初の青花皿3個体が出土し、他に15トレンチには萩焼の可能性のあるものや13トレンチに西日本系の陶器片1点がある。器種は碗、皿類が中心となる。土師質土器はいずれも明るい黄・橙色を呈する皿の小片を中心とするもので、略完形の水注1点がある。瓦質土器の出土は少なく、土製品としては土鈴2点が11トレンチP2上面から確認された。瓦類は桟瓦を主体とし、微かな布目の付着痕が認められるものを含んでいる。本葺き瓦と判明するものは非常に少ない丸瓦であった。瓦当には江戸式と言われている幕末の特徴を持つものが主体をなし、これに東海式文様が1点確認された。桟瓦の側面に「タ」・「チ」や「気」・「気」・の刻印を持つものがそれぞれ1点ずつ見られたが、近代以降の可能性がある。鉄製品は釘を中心とするもので、錆が著しく器種不明なものも多い。

第1表 トレンチ別近代以降遺物一	笙 1 表	レンチ別近代以降遺物一覧	旨
------------------	-------	--------------	---

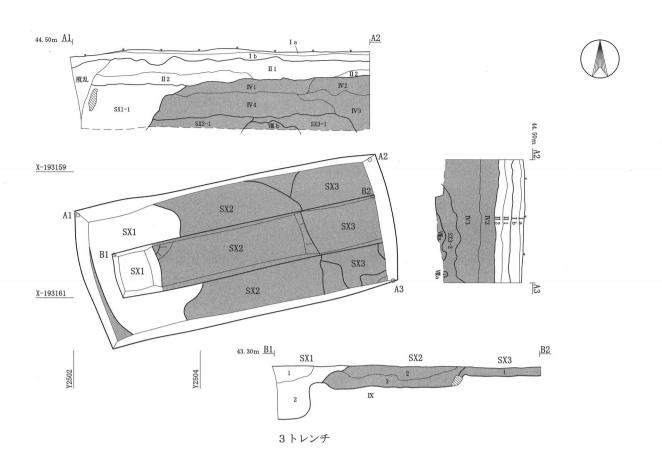
第2表 トレンチ別中・近世遺物一覧

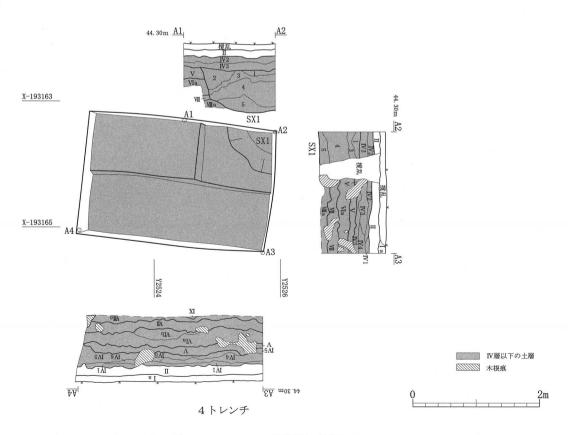
28/28/17	x25 50.	80 95	土師質	瓦質	* T	スレート変	AN TE	#0.7	46.04.0	E2 M5	200	A 91	傷 米	調査区	磁器	胸器	主教質主器	瓦質土器	土製品	瓦類	鋼製品	鉄製品	その他	合計	篇 考
\$41,000	700 647	79 60	土器	土器	11- 26	AV-FA	X 25	" / ^	9X 9X 118	54 MI	* 971E	- DI	24 - A	1 T	2	6				16				24	瓦類: 軒瓦1、鬼瓦1、布目2含む。
1 T	11	4		1				5	1		1	23	その他:銅線	2 T	16	2	1	1		65					瓦類: 軒瓦1、布目1、製斗瓦1含む。
													その他:タイル7、フィルム2、	3 T	1	5	1			4					瓦側:布目1含む。
2 T	140	19	2	8	1	38	1	55	23	16	19	322	歯ブラシ2、磁製絵具入2、雲母片1等。	3 T S X 2	1					1	1			3	銅製品:古銭1
3 T	5	1				1		1	4	1		13		4 T		1								1	
4 T								,		_		5		4 T S X 1						1				1	
	,			-				- 1						5 T	2					2				4	
5 T	8	1						1				10		6 T	2	1				49				52	瓦順: 有孔3合む。
6 T	- 4						1	3	27			35		7 T	5	1	2			10				17	
7 T	1							3				4		8 T S D1	19	21	3	,		- 4					夏頻: 有孔1含む。
8 T	8	2				1	-	2				13		9 T	9	13	3	1	-	4			- 1	26	その他:大形炭化物1
					-				-					10T	20	11	١,			25	-		-		瓦類:杆瓦5、刻印1 (「二六」、コンクリート(+治) 含む。
9 T	94	13			j.			2	2		2	114	その他:銅線、コンクリート	11T	18					24	,		2		元頭: 杯足3、刻刊1 (1 - ペルコンテリート1971) 古む。 瓦類: 杯瓦4、布目1合む。銅製品: 古銭1。その他: 大形炭化物2
10T	10	3						2	10			25		HTPI	10	20	1			1	1		- 6	75	AM: 作品4、作日1日で Macos - 白奴15 てジ18 - 人形が1に62
11T	7	4						8				19		11T P 2			1		2	1		- 1	1		土製品:土鈴2。その他:大形炭化物1
12T	3	1					-				,	5	その他:銅線	12T	9	12	† – ´	2		2				25	1. 3cm (1. 7/10) (1. 7/10) (1. 7/10) (1. 7/10)
13T		1	-		35					-	<u> </u>			13T	_	2				184	-			186	瓦飯: 軒瓦5、布目1、有孔5含む。
	3	1			-		2	3	4		ŀ		その他:タイル1、	14T						14					瓦梨: 軒瓦1、有孔2含む。
14T	6	1			49			8	2			66	洋瓦:刺印5含む。	15T	4	6				3					瓦類:布目1,製斗瓦1
15T		100					1					1		15TW1~6	8	10	13	1		6	4	13	9	64	類製品: 古銭2、切羽1、釘1。その他: 焼成碟5、火打石片1、大形炭化物3
16T		 						1		-		1		16T	1	1								2	
17T	17	4	-			-					т .		7 - 4 - 7	17T	3	1	6							10	胸器:中世
		ļ											その他: 視	17T S K 1						362				362	夏頻:軒瓦8、布目13、有孔八股斗瓦1、刻印3含む。
合 計	321	54	2	9	86	40	5	95	73	17	25	727		合 計	120	116	33	7	2	777	6	16	13	1090	



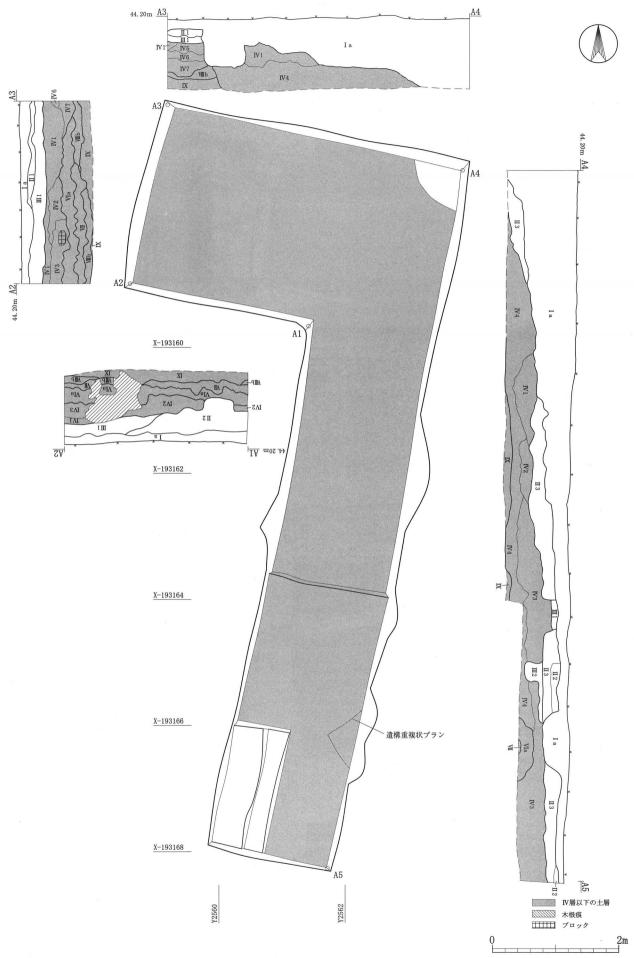


第6図 1・2トレンチ平面図・断面図

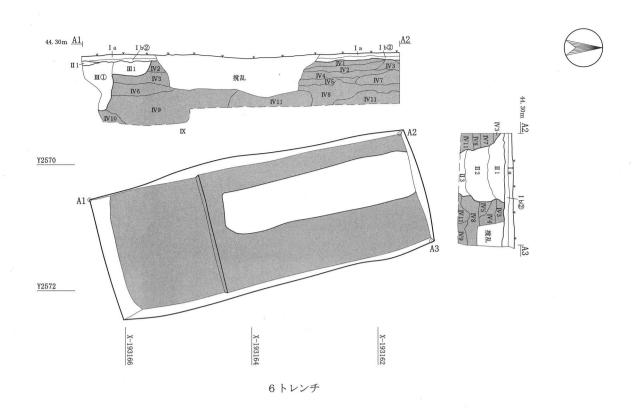


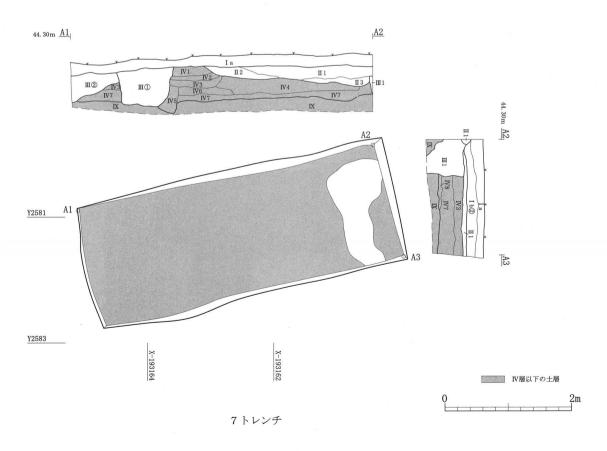


第7図 3・4トレンチ平面図・断面図

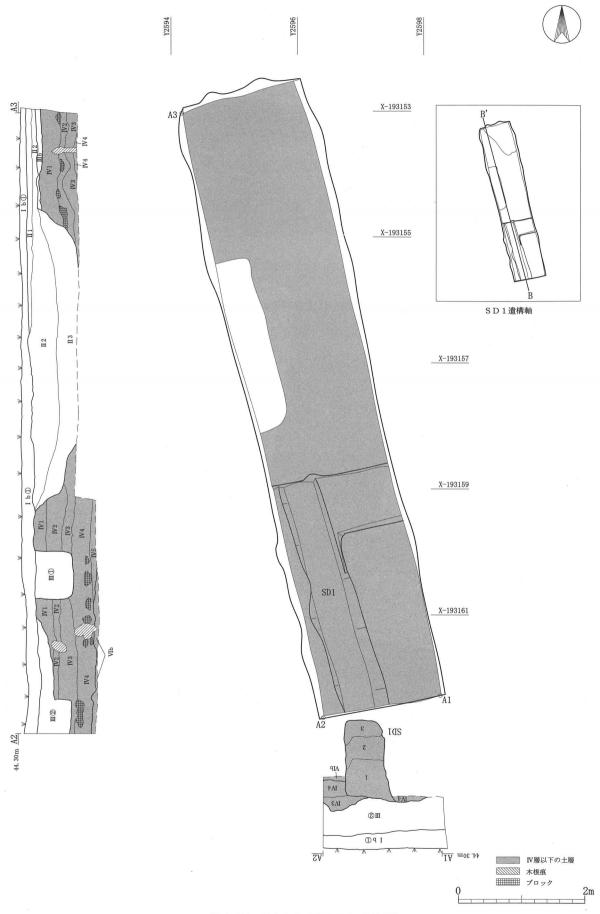


第8図 5トレンチ平面図・断面図



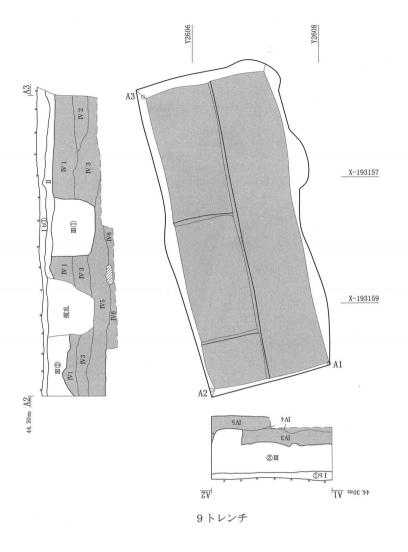


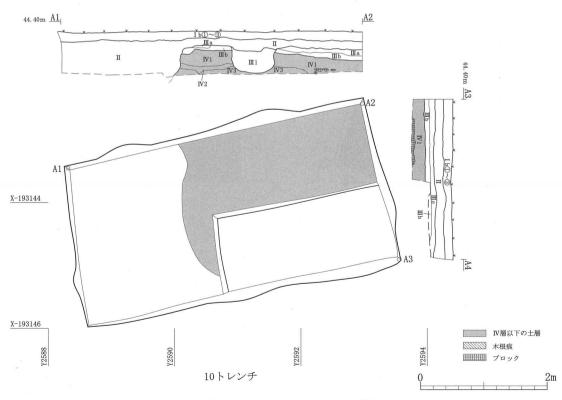
第9図 6・7トレンチ平面図・断面図



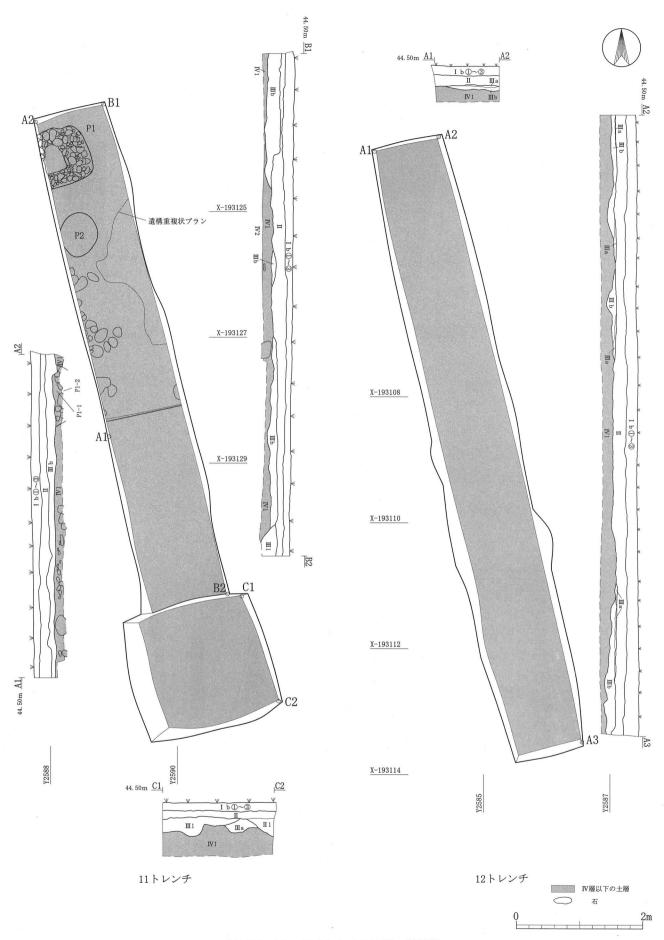
第10図 8トレンチ平面図・断面図



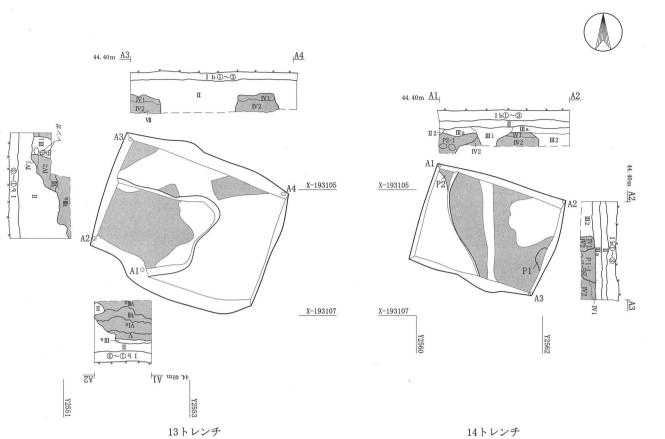




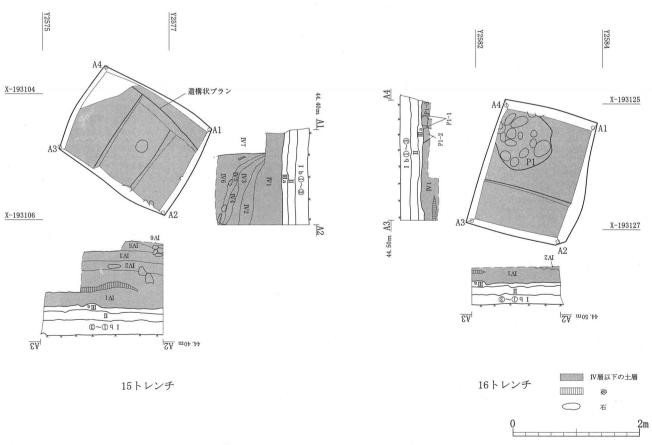
第11図 9・10トレンチ平面図・断面図



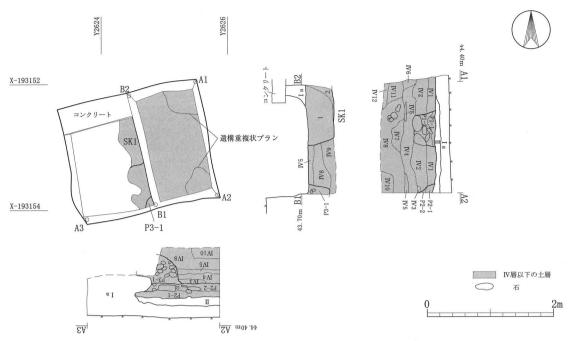
第12図 11・12トレンチ平面図・断面図



44. 40m A2



第13図 13~16トレンチ平面図・断面図



第14図 17トレンチ平面図・断面図

第3表 トレンチ土層説明(1)

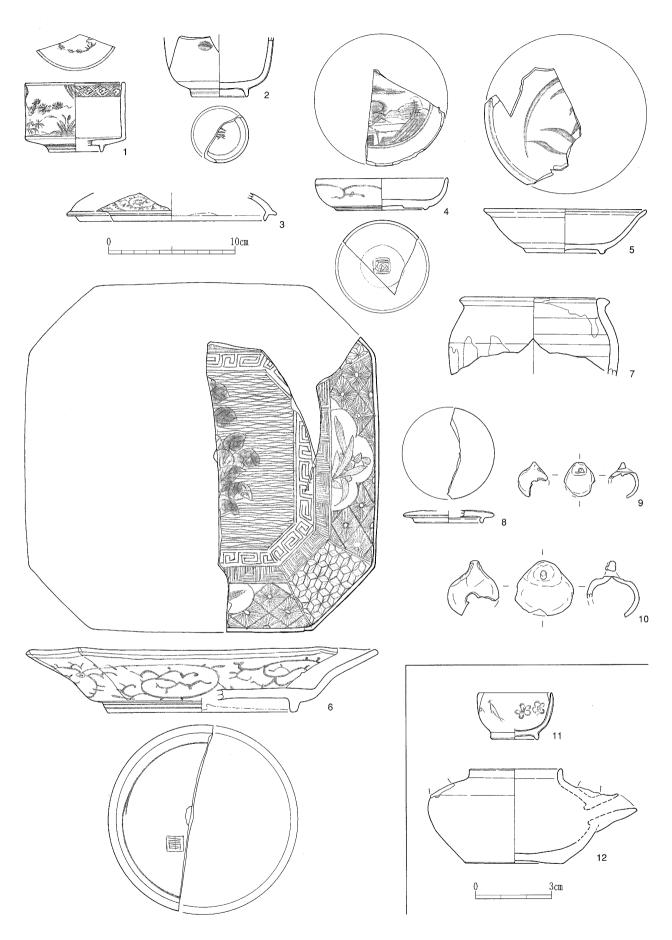
区	l l	層位	土 色	土性	備考	区	層	位	土 色	土性	備考
P.7	-	Ιa	10YR2/3 黒褐色		Ⅱ層起源の瓦礫層。	2 T	D		10YR6/6 明黄褐色	砂礫	明黄褐色砂質シルトを基質とし、径3~20cmの円礫から成る。
	-	I b	10YR6/6 明黄褐色	砂	25Y5/4帯色砂を主体とする現代の公園整備・整地層。	2 1	I		10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	現表十層。
	-	П 1	10YR2/3 黒褐色		径1~5 mmの焼土粒・炭化物少量。含有物わずかに含む。		I	_	25YR6/6 明黄褐色	砂	現代の公園整備・整地砂層。1TIb層と同じ。
	H	II 2	101R2/3 黑褐色 10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	正片・ガラス片、径1~15mmの焼土粒・炭化物多量に含む。		II		10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	名含有物はわずかに含む。
	-		2	1 220	985			-	101R2/3 黑褐色 10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	ac at a say 1 K to 19970 17 at 19
	-		5YR3/4 暗赤褐色		径1~20mmの焼土粒・ブロック主体。瓦片多量。炭化物わずかに含む。 上面は固い。径1~3cmの円碟多量、径1~10mmの欄a層ブロック・		П				各含有物はわずかに含む。
1 T	Н	V 1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	粒子、炭化物少量。		IV		10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径1~4 cmの円礫少量含む。上面は部分的に硬化。 径10cmの円礫・破砕礫多量、Ψ層ブロック少量含む。
	<u> </u>	⁄II a	10YR6/8 明黄褐色	シルト			IV	_	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	上半は部分的に硬化。
	_	IX	10YR4/6 褐色	砂礫	径 1 ~30cmの円礫主体。	1	IV	3	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	硬化は認められない。下半に円碟・Ⅲ層ブロック集中。 径10cmの円礫、径5mmの炭化物少量含む。
		1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	焼土粒を含まない。		IV	4	10YR2.5/3 暗褐色	砂質粘土	下半に10YR5/6黄褐色砂斑紋集中。
	SI	01 2	10YR3/3 暗褐色	礫	シルトを基質とした径1~20cmの円礫主体。鉄片や銅線含む。	3 T	VIII	a	10YR5/6 黄褐色	シルト	
		3	10YR3/2.5 暗褐色	シルト質砂	径1~20cmの円礫少量含む。		VIII	b	10YR4.5/6 黄褐色	シルト	径1~2cmの円礫を少量含む。削平により部分的に残存。
		Ιa	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	現表土層。		D	Υ.	10YR6/6 明黄褐色	砂礫	ほぼ本層上面近くまで削平されているようである。
	1	Ιb	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂	現代の公園整備・整地砂層。 1 TI b層 と同 じ。		SX1		10YR4/3.5 褐色	砂質シルト	締まり・粘性弱く、10YR4/3にぶい黄褐 色砂多量、現代磁器小片含む。
		Ⅱ 1	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	1 T I a 層に類似する瓦礫層。焼土・炭化物、ガラス片等多量に含む。		SAI		10YR3/3.5 暗褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂は含まないが、締まり・ 粘性さらに弱い。小形防空壕か?
		II 2	10YR5/6 黄褐色	シルト	Waa層起源の盛り土・整地層。			1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	径 $1\sim5$ cmの円礫少量。 10 YR5 $/6$ 黄褐色砂斑紋含む。
		II 3	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	瓦片・陶磁器類・ガラス片・コンクリート片多量含む。		SX2	2	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	SX2-2層に類似するが、10YR5/6黄褐色 砂斑紋・ブロック多量。大形礫含む。
		Ⅱ 4	10YR2/2.5 黒褐色	粘土質シルト	各含有物わずかに含む。			3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
		II 5	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	各含有物多量。貝類も含む。		SX3		10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	SX2-1・2層に類似するが、 III 層ブロック 多量に含む。
		II 6	10YR2.5/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色砂・畑a層ブロック含む。		SAS		10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	Ⅵ b 層斑紋、Ⅷ a 層ブロック・斑紋多量、径 1 ~ 5 cmの円礫少量含む。
2 T		II 7	10YR3/3.5 暗褐色	粘土質シルト	各含有物わずかに含む。		I	a	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	木草根による攪乱・現表土層。
	-	Ⅱ 8	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	砂質みが強くなり焼土粒増加。		I	I	10YR2.5/3 暗褐色	砂質シルト	各含有物はわずかに含む。
		II 9	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	下半にVI b 層斑紋・径 1 ~ 4 cmの円礫集中。防空壕か?		IV	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質砂	最大径 5 ㎜の砂粒を少量含む。
]	IV 1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	上半に径5~15cmの円礫集中。全体に淡いVI a · b 層斑紋含む。		IV	2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	径1~8 cmの円礫多量、最大径3 cmの黄褐 色砂斑紋・VI a 層ブロック少量含む。
]	IV 2	10YR5/6 黄褐色	砂礫	上半に径1~7 cmの円礫集中。その上端にIV 1層斑紋が集中。	4 T	IV	3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	径1~5 cmの円礫多量、Ⅲ a 層斑紋・ ブロック少量含む。部分的に硬化。
	1	VI a	10YR3/3.5 暗褐色	粘土質シルト	径0.5mm以下の白色物を僅かに含む。		IV	4	10YR6/6 明黄褐色	砂質シルト	径1~15cmの円礫多量に含む。上端を 中心に部分的に硬化。IX層起源の土層。
		VI b	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	クロボク類似の非常に密な土層。極めて淡い Wia 層斑紋含む。		IV	5	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
		VII	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	Wa 層斑紋を主体とする漸移層で、下半は10YR5/6黄褐色。		7	7	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	径 1 cmの円礫、径 5 mmの炭化物、径0.5mm 以下の白色物少量。部分的に10YR2/3。
	1	WII a	10YR6/8 明黄褐色	粘土質シルト	本トレンチでは漸移層が発達し、層厚は薄いようである。		VI	a	10YR2/25 黒褐色	粘土	Ⅵ b層より締まり強い。部分的に極めて 淡いV・Ⅵ b・Ⅶ層斑紋含む。

第4表 トレンチ土層説明(2)

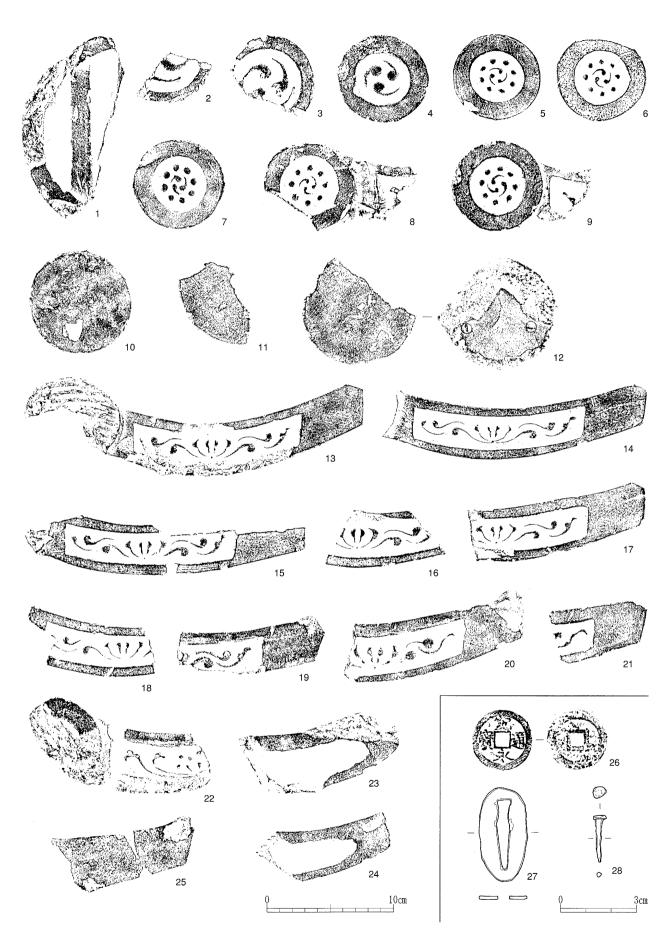
区	層	位	土 色	土 性	備考	区	層位	土 色	土性	備考				
	VI		10YR2/2 黒褐色	粘土	クロボク類似の非常に密な土層。極めて淡い間 a 層斑紋含む。	F	II (1)	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,				
	VI		10YR4/4 褐色		〒 a 層遊紋を主体とする漸移層で、下半は10YR5/6黄褐色。	1	11(2)	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	円礫・黄褐色砂を含まない。				
	VIII		10YR5/7 黄褐色	粘土質シルト	IN THE STANCE THE CONTROL OF THE CON	1	IV 1	10YR5/6 黄褐色	砂	礫をわずかに含む。				
1	IX	-	10YR6/8 明黄褐色	砂礫	明黄褐色砂質シルトを基質とし、径3~20cmの円碟から成る。		IV 2		-	10YR5/3にぶい黄褐色砂斑紋・ブロック				
4.77	1.4	$\overline{}$					-	10YR3/4 暗褐色	シルト質砂	を含み、砂質強い。 径1~3cmの円礫、径1mm以下の白色物少量。				
4 T		\vdash	10YR3/3 暗褐色		径1~3mmの焼土粒微量含む。 径1cm以下の円礫、径1mm以下の焼土粒	l	IV 3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	下半に極めて淡いⅣ7層斑紋を含む。				
	0.77-		10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	微量含み、上半に集中する。	7 T	IV 4	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径 1 ~10cmの円礫多量に含む。				
	SX1		10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質砂	径1~3cmの円礫、径1~3cmの焼土粒少量、径1~3cmの 炭化物徴量含む。		IV 5	10YR3/3 暗褐色		締まり・粘性弱くやや暗化。 上半に径1~10cmの円礫集中。下半に薄い				
		\vdash	10YR5/4 にぶい黄褐色		径 1 ~ 3 cmの円礫少量含む。 径1~3 mmの焼土粒多量、炭化物微量、径1~3 cmの円礫、		IV 6	10YR5/4 にぶい黄褐色		10YR2/2黒褐色粘土層。				
		ш	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	■ a 層ブロック少量含む。		IV 7	10YR3/2 黒褐色		層北側は円礫多量に含む。				
	I		10YR3/3 暗褐色	シルト質砂	現表土・盛り土・攪乱層。 径1~10cmの円礫、径1~5 mmの炭化物		IV 8	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	径1cmのWa層ブロック・斑紋主体。				
	П	1	10YR3/4 暗褐色	シルト質砂	多量、瓦片少量含む瓦礫層。		IX	10YR4/6 褐色	砂礫					
	11	2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	部分的に円礫、破砕礫、焼土粒・ブロック (5YR3/4暗赤褐色シルト質砂) 集中。		I b①	10YR2/2 黒褐色	シルト質砂	CV - co selective.				
	П	3	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	円礫、破砕礫を含み、焼土はほとんど含まない。		П 1	10YR3.5/4 褐色	砂質シルト	径1~30mmの焼土粒・ブロック多量、炭化物少量。瓦片含む。				
	Ш	1	10YR5/6 黄褐色	砂礫	〒 b・X層起源の盛り土・整地層。下端に 10YR3/4暗褐色シルト斑紋集中。		П 2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	上半に径1~10mmの焼土粒、下半に瓦礫・ コンクリート片集中。炭化物多量。				
	Ш	2	10YR3/3 暗褐色	シルト質砂	径1~3cmの円礫多量に含む。		П 3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	瓦片主体。				
	IV	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	上半に径1~6cmの円礫、下半に径1cmの炭化物、下端に 10YR6/6明黄褐色砂集中。		Шь	10YR4/4 褐色	シルト質砂	上面〜上半は固く、黒化。過半にⅢ a 層類 似砂の斑紋集中し、Ⅳ 1 層が混じる。				
	IV	2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	径 1 ~ 2 cmの円礫少量、径 1 ~ 3 mmの 焼土粒・炭化物微量含む。		11(1)	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト					
5 T	IV	3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	径1~5㎝の円礫多量、径1~3㎜の炭化 物少量、焼土粒微量。Ⅶ層ブロック含む。		112	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト					
	IV	4	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	円礫少量、IX層砂粒の淡い斑紋含む。		IV 1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	下半に10YR4/3にぶい黄褐色砂とW2層 のブロック・斑紋を含む。				
	IV	5	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	径1~5cmの円礫少量、径1~3mmの炭化物・焼土粒微量。極めて淡いIV6斑紋含む。	8 T	IV 2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	ト半1010VDc /110 どい 恭敬在かずロッカ				
	IV	6	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	層全体が淡い斑紋状をなす。径1cmの円礫、 径1mm以下の炭化物微量。		IV 3	10YR3/2 黒褐色	粘土	径 1 ~ 5 mmの m a 層粒・淡い斑紋多量、 径 1 ~ 7 mmの10YR8/4浅黄色粘土粒少量。				
	IV	7	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	円礫多量。VIa層にも類似する。		IV 4	10YR2/3 黒褐色	粘土	住1~ 7 mmの10 Y R8/ 4後典色柗工程少量 智 a 層粒・ブロック増加し、最大径25cmで 測る。他の含有物わずかに含む。				
	VI	a	10YR2/3 黒褐色	粘土	径 1 ~ 4 cmの円礫少量含む。		IV 5	10YR2.5/3 暗褐色	粘土	径1~3 mmのWa 層粒少量。				
	VI	I	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	径 1 cmの円礫を微量含む。		VI b	10YR2/1 黒色	粘土	締まり・粘性非常に強い。				
	VIII	b	10YR4.5/4 黄褐色	シルト	径 1 ~10cmの円礫多量。		1	10YR2/3 黒褐色	粘土	径 1~10mmの m a 層粒・ブロック多量、 径 1~ 5 mmの炭化物少量。				
	IX	7	10YR6/6 明黄褐色	砂礫			SD1 2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	SD-1層に類似するが、締まり・粘性非常に弱い。各含有物は減少。				
	I	a	10YR3/3 暗褐色	シルト質砂	現表土・盛り土・攪乱層。		3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	締まり・粘性非常に弱い。径1~40mmの側 a層粒・ブロック、径10~30cmの円礫多量。				
	Ιb	2	10YR5.5/4 明 黄褐色	砂	現グランドの整地砂層。		I b①	10YR2/2 黒褐色	シルト質砂	る情報・プロフク、1±10 -300mッ万味多里。				
	п	1	10YR35/4 褐色	砂質シルト	径1~30mmの焼土粒・ブロック多量、炭化物少量。瓦片含む。		п	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	上半に径1~10mmの焼土粒、下半に瓦礫・ コンクリート片集中。炭化物多量。				
	П	2	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト			II(1)	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	コンクリード月来中。灰化物多里。				
	П	3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	下端に近上斑秋果中。 極めて淡い畑 a 層斑紋を含む。		11(2)	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト					
	Ш	1	10YR4/3 におい黄褐色	砂質シルト	径 1 ~ 3 cmの円礫少量。上半に最大径 2 cmの炭化物集中。		IV 1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径1~15cmの円礫少量。10YR5/4にぶい				
	Ш	(I)	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径10~30cmの円礫多量。上半に10YR	9 T	IV 2	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	<u> 黄褐色砂の淡い斑紋含む。</u> 上半に10YR2/2黒褐色粘土と10YR5/4に				
	IV	1	10YR5/6 黄褐色	砂礫	4.5/4にぶい黄褐色砂集中。 礫をわずかに含む。		IV 3	10YR4/4 褐色	砂礫	ぶい黄褐色砂の互層が見られる。 径1~25cmの円礫主体。IX層起源の整地層。				
	IV		10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	10YR5/3にぶい黄褐色砂斑紋・ブロックを含み、砂質強い。		IV 4	10YR3/2 黒褐色	粘土	径1~5mmのWma層粒・淡い斑紋多量。径				
6 T	IV		10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径1~3cmの円礫、径1mm以下の白色物少量。		IV 5	10YR2/3 黒褐色	粘土	1~7 mmの10YR8/4浅黄色粘土粒少量。 ៕ a 層粒・ブロック増加し、最大径25cmを				
	IV		10YR25/3 暗褐色		下半に極めて淡いIV 7 層斑紋を含む。 径1~5 mの炭化物・白色物少量。上端にIV 1 層斑紋、 下端にIV 5 層斑紋を含む。		IV 6	10YR2.5/3 暗褐色	粘土	測る。他の含有物わずかに含む。 径1~3mmのMa層粒少量。				
	IV		10YR4.5/6 黄褐色		↑端にN 5層域収を含む。 Ⅷ a 層ブロック主体の整地層。		I b ①	10YR2/2 黒褐色	シルト質砂	- 0 mm / m 0 /m 12 / 250				
	IV		10YR5/4 に は 小黄褐色	シルト質砂	層中に炭化物を含む層厚約 2 cmの10YR3/4 暗褐色砂層 2 枚、黄橙褐色ブロック含む。		I b ②	10YR5/4 におい黄褐色						
	IV		10YR5/4 におい黄褐色	砂礫	最大径18cmの円礫主体。最大径 6 cmの10YR		I b ③	10YR1.7/1 黒色	シルト質砂					
	IV		10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	7/3黄橙褐色粘土ブロック少量含む。 径1~3 cmの円礫少量、最大径1 cmの炭化物、		П	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	上半に径1~10mmの焼土粒、下半に瓦礫・				
	IV		10YR2/3 黒褐色		径1~3mmの焼土粒微量含む。 最大径5cmの焼土ブロックを含む。		M a	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質ンルド	コンクリート片集中。炭化物多量。 上面は締まり強く固い。上半に極めて薄い				
	IV I	-	10YR2/2 黒褐色		粒子がやや粗く、円礫、焼土粒微量含む。	10 T	III b	10YR4/4 褐色	シルト質砂	層が複数見られる。 上面〜上半は固く、黒化。過半に□a層類 似砂の斑紋集中し、Ⅳ1層が混じる。				
	IV I		10YR2/2 無獨巴 10YR2/1 黒色	シルト質粘土	松丁がでで低く、内保、焼工粒板重含む。 非常に密。径1~8cmの円礫、径1~3mmの 焼土粒微量含む。		ш в	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	下半に最大径15cmの円礫とⅢ a 層類似の砂				
	IX		10YR6 / 6 明	砂礫					粘土質シルト	が集中。 下半に10YR4/3にぶい黄褐色砂とW2層				
\vdash			黄褐色 10VD2 / 3 暗視佈		2 T IX層対比。 田志士・成り士・増刊屋		IV 1	10YR2/3 黒褐色		のブロック・斑紋を含む。				
	I	-	10YR3/3 暗褐色	シルト質砂	現表土・盛り土・攪乱層。		IV 2	10YR6/2 におい黄橙色		№1層が混じる整地層。				
	I b	-	10YR5.5/4 明黄褐色	砂磨シャル	径1~30mmの焼土粒・ブロック多量、炭化物	\vdash	IV 3	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土					
7 T	I		10YR3.5/4 褐色	砂質シルト	少量。瓦片含む。 焼けた瓦片主体。最大径2cmの炭化物多量。		I b①		シルト質砂					
	П		10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	下端に焼土斑紋集中。	11 T	I b ②							
	П		10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	極めて淡い〒 a 層斑紋を含む。瓦小片含む。 径1~12cmの円礫多量。径1~3 mmの炭化物		I b3		シルト質砂	上半)*径1~10				
	Ш	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	住1~12cmの円樑多重。住1~3 mmの灰化物 少量含む。		П	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	上半に径1~10mmの焼土粒、下半に瓦礫・ コンクリート片集中。炭化物多量。				

第5表 トレンチ土層説明(3)

区	層位	土 色	土 性	備考	区	層	位	土 色	土 性	備考
	II 1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	コンクリート多量に含み、焼土粒は少ない。		Ιb	3	10YR1.7/1 黑色	シルト質砂	
	Ша	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂	上面は締まり強く固い。上半に極めて薄い 層が複数見られる。		П	[10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	上半に径1~10mmの焼土粒、下半に瓦礫・ コンクリート片集中。炭化物多量。
	Шb	10YR4/4 褐色	シルト質砂	上面〜上半は固く、黒化。過半にⅢa層 類似砂の斑紋集中し、Ⅳ1層が混じる。		Ш	a	10YR4/3 にぶ 黄褐色	砂	上面は締まり強く固い。上半に極めて薄い層が複数見られる。
	II 1	10YR4/4 褐色	シルト質砂	III a層とIII b層が混じった層。		IV	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	中央に斑紋状の10YR5/2にぶい黄褐色砂層 が見られる。
11 T	IV 1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	円礫多量に含む。	_	IV	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	10YR5/8黄褐色粘土と10YR7/4にぶい黄 橙色砂質シルトの粒子・ブロック多量。
	IV 2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径 1 ~ 10cmの円礫、径 1 ~ 5 mmの炭化物多量に含む。	15 T	IV	3	10YR3/2 黒褐色	砂質粘土	Ⅳ 5 層質粘土粒・ブロック多量、10YR5/8 黄褐色粘土粒・ブロック少量。
	1	10YR3/3 暗褐色	砂質粘土	締まりあり、粘性弱い。黄褐色シルト粒多量、径1~3mmの焼土粒少量。		IV	4	10YR3/2.5 暗褐色	砂質粘土	IV 3層にIV 5層粒・ブロックを多量に含ん だ層。
	P1 2	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	締まり・粘性弱い。粗い10YR6/6明黄褐 色砂多量に含む。		IV	5	10YR6/8 明黄褐色	シルト質粘土	締まり強い。Wma層起源の整地層。
	P2	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	径 1 ~ 30mmの炭化物、径 1 ~ 3 cmの円礫多量、径 1 ~ 3 mmの焼土粒微量。		IV	6	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	径1~5mmの焼土粒・炭化物多量、N5層・ 黄褐色粘土粒少量。
	I b①	10YR2/2 黒褐色	シルト質砂	J. J		lV	7	10YR3/4 暗褐色	粘土	径1~3mmの焼土粒・炭化物多量、17TN 12層の極めて淡い斑紋を含む。
	I b2	10YR5/4 にふず褐色	砂			I b	1	10YR2/2 黒褐色	シルト質砂	and the state of
	I b③	10YR1.7/1 黑色	シルト質砂		ļ	I b	2	10YR5/4 によい黄褐色	砂	
12 T	П	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	上半に径1~10mmの焼土粒、下半に瓦礫・ コンクリート片集中。炭化物多量。		Ιb	3	10YR1.7/1黒色	シルト質砂	
	II a	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂	上面は締まり強く固い。上半に極めて薄い 層が複数見られる。		П	[10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	上半に径1~10mmの焼土粒、下半に瓦礫・ コンクリート片集中。炭化物多量。
	Шb	10YR4/4 褐色	シルト質砂	上面~上半は固く、黒化。過半にⅢ a 層類 似砂の斑紋集中し、Ⅳ 1 層が混じる。	16T	Ш	a	10YR4/3 におい黄褐色	砂	上面は締まり強く固い。上半に極めて薄い層 が複数見られる。
	IV 1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	円礫多量に含む。	10.1	IV	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	円礫多量に含む。
	Ιb①	10YR2/2 黒褐色	シルト質砂			IV	2	10YR2/25 黒褐色	シルト質粘土	
	I b②	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂				1	10YR55/4 におい黄橙色	砂	締まり・粘性無し。粗い砂粒で、径1cmの 円礫微量含む。
	Ib®	10YR1.7/1 黒色	シルト質砂			P1	2	10YR3/3.5 暗褐色	砂質粘土	締まり強いが粘性弱い。径1~3mmの炭化 物少量、径1cmの円礫微量含む。
	II	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	コンクリート多量に含み、焼土粒は少ない。			3	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	締まり・粘性強い。 N 2 層斑紋主体。
	II a	10YR4/3 にぶい 黄褐色	砂	上面は締まり強く固い。上半に極めて薄い 層が複数見られる。		Ι.	a	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	現表土・攪乱層。
13 T	П 1	10YR2/3 黒褐色	粘土	煉瓦・円礫を含む。		П	[10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物、焼土粒、円礫、瓦片を多量に含む。
	IV 1	10YR2/2 黒褐色	粘土	非常に密。極めて淡いIV2層斑紋含む。		IV	1	10YR2.5/3 暗褐色	粘土質シルト	締まり強く固い。10YR5/6黄褐色粘土の薄 い版築状の層が見られる。
	IV 2	10YR3/4 暗褐色	粘土	非常に密。極めて淡い៕ a 層斑紋含む。 黄褐色シルト斑紋は増加。	İ	IV	2	10YR3/2.5 暗褐色	粘土質シルト	締まり強く固い。10YR5/6黄褐色シルト・ 粘土の斑紋含む。
	V	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	径 1 cmの円礫、径 5 mmの炭化物、径0.5mm 以下の白色物少量。部分的に10YR2/3。		IV .	3	10YR5/6 黄褐色	粘土	締まり強く固い。10YR5/6黄褐色粘土ブロッ ク・粒子主体の版築状の層。
	VI a	10YR2/2.5 黒褐色	粘土	VI b層より締まり強い。部分的に極めて 淡い V・VI b・VII層斑紋含む。		IV	4	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/6黄褐色粘土粒・斑紋、焼土粒、 炭化物多量に含む。
	VII	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	Ⅲ a 層斑紋を主体とする漸移層で、下半は 10YR5/6黄褐色。		IV	5	10YR5/6 黄褐色	粘土	Ⅳ3層と同じ版築状の層。
	VII a	10YR6/8 明黄褐色	粘土質シルト			IV	6	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/6黄褐色粘土粒・斑紋、円礫、炭 化物、焼土粒多量に含む。
	I b①	10YR2/2 黒褐色	シルト質砂			IV	7	10YR3.5/4 褐色	粘土	10YR5/6黄褐色粘土粒主体。
	I b②	10YR5/4 にい黄褐色	砂			IV :	8	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/6黄褐色粘土粒・ブロック少量、径 1~20cmの円礫が部分的に集中。
	I b3	10YR1.7/1 黒色	シルト質砂	Thursday and another table and the second	17 T	IV	9	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	締まり強く、黄褐色粘土粒が増加した層。
	П	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	上半に径1~10mmの焼土粒、下半に瓦礫・ コンクリート片集中。炭化物多量。		IV 1	10	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	径3~10cmの円礫多量、黄褐色粘土粒・斑 紋部分的に集中。
	II 1		砂質シルト	各含有物は減少し、ほとんど瓦礫を含まない。		IV 1	11	10YR2/25 黒褐色	粘土	締まり強く固い。淡い黄褐色粘土斑紋少量 含む。
	II 2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	「日本洋瓦」(1924年 [大正13] 以降)の 刻印を持つ洋瓦片主体。		IV 1	12	10YR3.5/4 褐色	粘土	締まり非常に強い。径 1 mm以下の焼土粒・ 炭化物微量。
14 T		10YR4/3 にぶい黄褐色	砂	上面は締まり強く固い。上半に極めて薄い 層が複数見られる。	1	P1	1	10YR5/2 にぶい黄褐色	砂	締まり、粘性なし。粗い砂粒主体。
	П 1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	ブロック状・斑紋状にⅢ a 層の砂が多量。			2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	締まり・粘性あり。最大径30cmのやや扁平な 円礫含む。
	11 2	10YR4/4 褐色	シルト質砂	径 1~15cmの円礫多量。砂粒も多い。		P2	1	10YR5/2 におい黄褐色	砂	締まり・粘性なし。粗い砂粒主体。
-	IV 1	10YR2/2 黒褐色	粘土	非常に密。極めて淡い IV 2 層斑紋含む。			2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	締まり・粘性あり。最大径30cmの扁平円礫含む。
-	IV 2	10YR3/4 暗褐色	粘土	非常に密。極めて淡い咖a層斑紋含む。		Р3	1	10YR2.5/3 暗褐色		締まり・粘性あり。最大径15cmの円礫含む。 上半に焼土粒・炭化物集中。
	-+-		シルト質粘土	下半に径5~10cmの円礫、10YR6/6明黄 褐色シルトブロック・斑紋集中。		SK1		10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	締まり弱い。桟瓦片主体。
		10YR25/3 暗褐色		下半に径10~15cmの円礫、10YR6/6明黄 褐色シルトブロック・斑紋集中。			2	10YR3/3 暗褐色	粘土	締まり・粘性あり。瓦片を含まない。
15 T		10YR2/2 黒褐色	シルト質砂		<u> </u>					
	I b②	10YR5/4 におい黄褐色	砂							



第15図 出土遺物実測図(1)



第16図 出土遺物実測図(2)及び拓影

第6表 遺物観察表 (カッコ内は復元および残存数値)

	1		,			34- 5	Ξ. / \					
挿図番号	図版番号	トレンチ	遺構·層位	種別	器種	口径	量(cm) 底径	器高	特	製作地	年 代	登録番号
第15図 1	図版4-1	8 T	IV層	磁器	染付半筒碗	(7.8)	(4.2)	5.5	内面:四方棒(圏線滲む)。見込は重円圏内に松竹梅繋。外面:松・柳・春蘭?底面:横高台。	肥前	18 c 後半~19 c 初頭	J001
第15図 2	図版4-2	12 T	IV1層	磁器	染付小丸碗	(1.12)	(4.5)	(4.75)		肥前	18 c 後半~19 c 前半	<u> </u>
第15図3	図版4-3	11 T	IV1層	磁器	染付段重蓋	内径:(14.6) 岁	径:(16.4)	(2.2)		肥前	18 c 後半~19 c 前半	-
第15図 4	図版4-4	8 T	IV層	磁器	染付角皿	(10.2)	(7.1)	2.5	内面:見込に重円圏内に山水楼閣図。外面:蔦唐草。底面:蛇ノ目高台。二重角枠渦福。	肥前	18 c 中~19 c 初頭	J004
第15図 5	図版4-5	5 T	北東隅攪乱	磁器	青花皿	(12.5)	(6.1)	3.5	内面:草文。外面:高台内側は無釉で放射状のかんな痕。高台には離砂付着。	中国	16 c 末~17 c 中頃(明末~請初)	J005
第15図 6	図版4-6	2 T	Ⅱ8・9層	磁器	染付角皿(八寸)	(27.2)	(15.0)	5.1	内面:紫菱に窓絵(繭)、麻の葉。見込は牡丹?、横波縞(よろけ綿)。外面:花唐草、底面に銘。割れ面に焼懸ぎ痕。	肥前	18 c 末~19 c 前半	J006
第15図7	図版4-7	8 T	IV層	陶器	小瓷	(12)		(6.2)	内外面:鉄釉+内面から外面になまこ釉。	堤	19 c (幕末〜明治)	I001
第15図8	図版4-8	10 T	IV1層	陶器	蓋	内径:(5.45) 夕	怪: (7.2)	(0.95)	外面:施釉 (鉄釉)。	堤	19 c (幕末~明治)	1002
第15図11	図版4-11	8 T	IV層	磁器	色絵紅猪口ま たは遊技具	(2.9)	(1.9)	1.89	外面:松葉-淡緑、梅-暗朱。内外面施釉 (淡青灰色気味)。口唇部に釉なし。	肥前		J007
第15図12	図版4-12	8 T	東壁Ⅳ3層下位	土師質 土器	水注(遊技具?)	3.7	3.9	3.75	外面: 口縁内側から底部に回転ナデ。2ヶ所の貼付裏。注口貼付ナデ無し。 底面: 糸切痕。 色調: にぶい費: 程褐色。焼成:良好。胎土級需で径05~15㎜の石英・赤色微粒子少量含む。	在地		1003
	図版4-18	8 T	IV1~3層	磁器	青花皿	3.	8×3.1		内面:口縁外面の端部に圏線二条、意匠不明文様。外面:口縁端部に圏線二条。表面は焼成不か二次焼成のため荒れる。	中国	16 c 末~17 c 前半(明末~清初)	J 008
	図版4-19	3 T	S X 1 1層	磁器	青花皿	2.9	9×1.8		内面:口縁端部に圏線一条と意匠不明文様。外面:口縁端部に圏線二条。	中国	16 c 末~17 c 前半(明末~清初)	J 009
	図版4-20	7 T		磁器	染付皿		(13.7)	(1.9)	内面:山水文。外面:高台脇二重圏線。高台内二重圏線。延宝様式(藍柿右衛門様式)。	肥前	17 c 末~18 c 初頭	J 010
	図版4-21	_		磁器	染付碗		(3.65)	(2.6)		肥前	18 c 末~19 c 初	J 011
	図版4-22		IV1~3層	磁器	染付半筒碗		(3.55)	(1.25)		肥前	18 c 後半	J 012
	図版4-23	_		磁器	色絵洗盃?		7×3.2			肥前	19 c 前半	J 013
	図版4-24			磁器	白磁隅切角小皿		8×2.6	(0.0)		切込	19 c 前半	J 014
	図版4-25	_	Wo ole	磁器	白磁端反皿		(6.75)			瀬戸	19 c 中頃 (幕末頃)	J 015
	図版4-26		IV8・9層	陶器	無釉焼締甕		0×4.7			在地	13 c後半~14 c 前半(鎌倉後半)	1
 	図版4-27	2 T	Ⅳ1~3層	陶器	鉢 Ⅲ		0×5.5 0×8.0			野榧? 肥前	18 c 代 18 c 以降	I 005
ļ	図版4-28 図版4-29	+		陶器	IIIT		6×2.8			肥前	18 c 以降	I 006
ļ	図版4-29		P1周辺Ⅳ1層 Ⅳ1下層~2層	陶器	碗	(15.3)	∪ ^ ∠.ŏ	(1.75)		肥 刑 萩 ?	(17 c 代 ?)	I 007
	図版5-31	9 T	14 1 1.1周 ~ 21周	陶器	蓋	(15.3) 内径5.5 夕	(深-7.4	1.95		秋 : 堀相馬	(17 c 代, r) 19 c 中頃(幕末頃)	I 008
<u> </u>	図版5-31		 	陶器		10.5×9.5	ret./.4	1.90	外田・緑色相随相。工瓶の盒。 播目は緻密。胎土は緻密で焼成も良好。備前以西の製品か?	·雅州馬	19 C 中頃(裕木頃)	I 009
\vdash	図版5-33	-	IV8・9層	土師質土器	無相規制領針	(10.35)	(6.4)	(2.1)		在地	100.	I 010
l	図版5-34		SD1-1層	土師質土器	7007	(10.33)	(6.8)	(1.6)		在地		I 011
	図版5-35		I~IV6層	土師質土器	III.		(8.0)	(1.4)	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	在地		I 012
	図版5-36	+	S D 1 -1層	土師質土器	III.		(6.0)	(1.3)		在地		I 014
	図版5-37		IV8層下半	土師質土器	III.	(11.5)	(0.0)	(4.8)		在地		I 015
	図版5-38		IV6層上半	土師質土器	壷	(5.4)		(3.9)		在地		I 016
	図版5-39	-	11 0/4 3.2.1	土師質土器			5 × 6.0	(0.07		在地		I 017
	図版5-40	-	IV1層	瓦質土器	蓋	(11.3)		(1.8)		在地		I 018
插図番号	図版番号				計画: 器種		₫ (cm)		特徵	11.76		登録番号
第15図 9			P2上面		上鈴		大幅2.4		穿孔方向は正面から。表面は不定方向のナデ。切り込み面はヘラ削り。内面上端は絞っている。胎土は緻密で	細雲母多	5量。色調はにぶい番格色	P 001
第15図10		-	P 2上面		上鈴		七幅4.5		9と同じ。ただし色調は色調はにぶい黄橙色。	11124.72	20 00,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	P 002
			遺構·層位		· 部位	法量(cm、			特 徽			登録番号
	図版5-41				丸瓦	径(17.0)、周			三ッ引両。内面に櫛掻き接合剥落痕。三ッ引上面にこれと平行する笵の御	数かな	木目痕あり。	F 001
第16図 2	図版5-42	-	IV 1 層		瓦軒丸部	径(7.8)、周			三巴左巻文。周縁幅は狭く文様区径は広い。巴の尾は長い。丸部瓦当は薄いが平部との比高差はある。燻銀。接合			H001
第16図3	図版5-43	+			瓦軒丸部	径(7.1)、周			三巴左巻文。2 に類似するが同笵関係不明。周縁幅はやや広い。燻銀。			H002
第16図 4	図版5-44	17 T	SK1-1層	軒栈	瓦軒丸部	径7.1、周和	輯1.3、瓦当	厚2.2	三巴左巻文。2・3よりも周縁幅は広く、巴の尾は短い。最も厚い丸部瓦当	i。燻鱼	ł.	H003
第16図 5	図版5-45	17T	SK1-1層	軒栈.	瓦軒丸部	径6.9、周縁	幅14、瓦	当厚1.5	珠文8+三巴左巻文。周縁幅は広く、文様区径は狭い。6・7と同笵だが、7よりもシャープで、平部との	比高差は	最も低く偏平。燻銀。	H004
第16図 6		14 T	II 2層	軒栈.	瓦軒丸部	径6.9、周線	幅14、瓦	当厚1.5	珠文8+三巴左巻文。6・7と同笵。燻銀。			H005
第16図 7	図版5-46	17T	SK1-1層	軒栈	瓦軒丸部	丸部:径72、周			珠文8+三巴左巻文。5・6と同笵だが、平部との比高差はあり瓦当も厚	い。海	《銀。接合部一部	H006
						平部 (15) 有	1(3.4)、厚 2	(15)~24	残存し、軒平部端に角がある。			
第16図 8	図版5-47	10 T		軒桟瓦	軒丸·軒平部	丸部:径72、周緒 瓦当長さ75、編4			丸部:珠文8+三巴左巻文。平部:13~19の右側子葉に類似する。同笵関係不 橙色化した燻銀。接合部の軒平部端は角がなくなめらか。	、明。 二	二次焼成のため	H007
Altre But o	BABLE 40	100		#T+D TC:	trak arvisén	丸部:径72、周 線				1 dn 20	J. J. J. D. D. J.	11,000
第16図 9	図版5-48 図版5-49				FF丸·軒平部 三軒丸部	至当長さ (35)、 径7.9、	幅 (4.1)、厚	ð15∼ (21)	丸部:珠文8+三巴右巻文。平部:8に類似。燻銀。接合部の軒平部端に レンズ状凸面となる無文。燻銀。接合部一部残存。	よ対か	なくなめらか。	H008
第16図11		13 T			瓦軒丸部	径 (9.1)			レンズ状凸面となる無文。無駄。接合的一即飛行。	蘇金 尼		H010
第16図12		11 T			瓦軒丸部	径8.5、			レンズ状凸面となる無文。10よりも入さい。二次が成めため位色にした。		印がある。極朝.	H011
						五当:長さ1			均整唐草文 (江戸式)。左側子葉の上端は表現されておらず、右側子葉と異な			
第16図13	図版5-50	17 T	SK1-1層	軒栈	瓦軒平部	丸当・長さ」 全長:25.5、	∞1、₹63.55、 幅26、厚さ	1.7~1.8	母瑩暦早又(江戸式)。左側丁葉の上端は表現されておりり、右側丁葉と異な接合部残存し、軒平部端に角がなくなめらか。右上端の角切りは短い。円形の	えが	* 100円円円形成。 1 ケ所。燻銀。	H012
第16図14	図版5-51	17 T	SK1-1層	軒栈	瓦軒平部	瓦当長さ19.4、			均整唐草文 (江戸式)。13と同笵関係。燻銀。接合部一部残存し、軒平部端(H013
第16図15	T	17 T	SK1-1層		瓦軒平部	瓦当長さ19.5、			均整唐草文 (江戸式)。13と同笵関係。接合部一部残存し、軒平部端に角がなくなめらか。右	********		H014
第16図16	1	17 T	SK1-1層		瓦軒平部	瓦当長さ (9.5)、	幅3.7、厚さ	\$1.5~ (2.1)	均整唐草文 (江戸式)。13と同笵関係。顕著な燻銀。			H015
第16図17		17 T	SK1-1層	軒栈	瓦軒平部	瓦当長さ (4.1)	、幅4.1、馬	₹ さ1.0~1.8	均整唐草文。(江戸式)。右上端の角切りは短い。顕著な燻銀。			H016
第16図18	T	10 T			瓦軒平部	瓦当長さ (9.3)			均整唐草文 (江戸式)。顕著な燻銀。			H017
第16図19	図版5-52	13 T		軒栈.	瓦軒平部	瓦当長さ (11.9)	、幅3.5、厚	₹1.4~(1.8)	均整唐草文 (江戸式)。子葉はやや太く、瓦当右側縁は斜位となる。右上端の角切りは短い。二次焼	成のた	め橙色化した燻銀。	H018
第16図20	図版5-53	10 T		軒栈.	瓦軒平部	瓦当長さ (145)	幅45、厚	ž 1.15~(1.5)	均整唐草文 (江戸式)。中心飾りは太く、第二唐草と子葉の尾部は長い。子葉上觜も長くなり、強く外反し曲線を描く。21と同	范関係。:	白上端の角切りは短い。燻銀。	H019
Mencion.		13T		軒栈。	瓦軒平部	瓦当長さ (7.8)			均整唐草文 (江戸式)。20と同笵関係だが、瓦当右側縁は斜位となる。右上端の角切りは、縁辺上辺への切り落としが細長い。	二次焼成	のため橙色化した燻銀。	H 020
第16図21		-						瓦当厦 (20)	軒平部幅広周縁+均整唐草文(東海式)。二次焼成のため橙色化した燻銀。	拉△	· 文K 1 十 南下 JTZ 文K 分場 1 -	H 021
第16図22	図版5-54	†		軒栈瓦	軒丸·軒平部	克部:径 (72)、 平部:瓦当長さ (12)~(21)	周稼鞴15、1 (9.2)、輻(4	(7)、厚さ	角がある。) 1 <u>4</u> 1	DD(34) T DD/M(C	
第16図22	図版5-54	10 Т				克器:径 (72)、 平部:瓦当長さ (12)~(21) 瓦当長さ(123)、) 1× □	The state of the s	H 022
第16図22 第16図23		10 T		軒桟瓦		(12)~(21) 瓦当長さ(123)、	幅(4.6)、厚さ	5 (12)~(1.6)	角がある。			H 022
第16図22 第16図23	図版5-55	10 T 11 T 11 T		軒桟瓦	? 軒平部	(12)~(21) 瓦当長さ(123)、	幅(4.6)、厚さ 編3.9、厚さ(1	5 (12)~(1.6) 125)~(1.75)	角がある。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻銀。両端欠損。	:燻銀。	両端欠損。	1
第16図22 第16図23 第16図24	図版5-55	10 T 11 T 11 T 13 T		軒桟瓦 軒桟瓦 軒桟.	?軒平部	(12)~(21) 瓦当長さ(123)、 瓦当長さ(95)、(幅(4.6)、厚さ 編3.9、厚さ(1 幅4.1、厚さ	5 (12) ~ (1.6) 125) ~ (1.75) 1 (1.5) ~ (1.7)	角がある。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻銀。両端欠損。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。24より小さい。二次焼成のため橙色化した	:燻銀。	両端欠損。	H 023
第16図22 第16図23 第16図24	図版5-55 図版5-56 図版5-57	10 T 11 T 11 T 13 T 1 T		軒桟瓦 軒桟瓦 軒桟.	?軒平部 ?軒平部 瓦軒平部	(12)~(21) 瓦当長さ(123)、 瓦当長さ(95)、(瓦当長さ(11.1)、	幅(4.6)、厚さ 編3.9、厚さ(1 幅4.1、厚さ 、幅6.5、	5(12)~(1.6) 125)~(1.75) 1(1.5)~(1.7) 厚さ2.0	角がある。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻銀。両端欠損。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。24より小さい。二次焼成のため橙色化した 関縁・文様区を持たない平坦瓦当面の無文。瓦当右側縁は斜位となる。石上端の角切りは短い。二次抗	:燻銀。	両端欠損。	H 023 H 024
第16図22 第16図23 第16図24	図版5-55 図版5-56 図版5-57 図版5-58	10 T 11 T 11 T 13 T 1 T 1 T		軒桟瓦 軒桟瓦	? 軒平部 ? 軒平部 瓦軒平部 鬼瓦	[12]~(21) 瓦当長さ(123)、 瓦当長さ(95)、(瓦当長さ(11.1)、 現存長9.5	編(4.6)、厚さ 編3.9、厚さ(1 編4.1、厚さ 、幅6.5、」 、幅12.2、	5(12)~(1.6) 125)~(1.75) i (1.5)~(1.7) 厚さ2.0 厚さ2.4	角がある。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻娘。両端欠損。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。24よりかさい。二次焼成のため橙色化した 周線文様区を持たない平坦瓦当面の無文。瓦当右側線は斜位となる。右上端の角切りは短い。二次加 二次焼成のため橙色化。 裏面に備掻き接合剥落痕。 有段式。凹面に布目痕。 燻銀。 凹面に布目痕。	:燻銀。	両端欠損。	H 023 H 024 H 025
第16図22 第16図23 第16図24	図版5-55 図版5-56 図版5-57 図版5-58 図版5-59	10 T 11 T 11 T 13 T 1 T 1 T 15 T	SK1-1層	軒桟瓦 軒桟瓦 軒桟五	? 軒平部 ? 軒平部 瓦軒平部 鬼瓦 丸瓦 丸瓦	[12]~(21) 瓦当長さ(123)。 瓦当長さ(95)。(瓦当長さ(11.1)。 現存長9.5 現存長15.0	幅(4.6)、厚さ 編3.9、厚さ(i 幅4.1、厚さ 、幅6.5、) 、幅12.2、 、幅9.5、	5(12)~(1.6) 125)~(1.75) 1(1.5)~(1.7) 厚さ2.0 厚さ2.4 厚さ2.4	角がある。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻銀。両端欠損。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。24よりかさい。二次焼成のため橙色化した 周縁文様区を持たない平坦瓦当面の無文。瓦当右爾縁は斜位となる。右上端の角切りは短い。二次加 二次焼成のため橙色化。寒面に備掻き接合剥落痕。 有段式。凹面に布目痕。燻銀。 凹面に布目痕。 端都に円形の孔が1ヶ所。	:燻銀。	両端欠損。	H023 H024 H025 F002
第16図22 第16図23 第16図24 第16図25	図版5-55 図版5-56 図版5-57 図版5-58 図版5-59 図版5-60 図版5-61	10 T 11 T 11 T 13 T 1 T 1 T 15 T 17 T 2 T	Ⅱ4層	軒栈石 軒栈石 軒栈.	? 軒平部 .? 軒平部 瓦軒平部 鬼瓦 丸瓦 丸瓦 上斗瓦 ! 斗瓦	(12)~(21) 瓦当長さ(123)、 瓦当長さ(13)、 現今長95 現存長95 現存長15.0 現存長13.2 現存長13.3	編(46)、厚さ(1 編39、厚さ(1 編41、厚さ、 「幅6.5、」 、幅12.2、 、幅9.5、 、幅15.0、	(12)~(1.6) (125)~(1.75) は(1.5)~(1.7) 厚さ2.0 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4	角がある。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻銀。両端欠損。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。24よりかさい。二次焼成のため橙色化した 関縁・交様区を持たない平坦瓦当面の無文。瓦当右爾線は斜位となる。右上端の角切りは短い。二次加二、次焼成のため橙色化。 裏面に櫛掻き接合剥落痕。 有段式。凹面に布目痕。 燻銀。 凹面に布目痕。 燻銀。 端部に円形の孔が1ヶ所。 端部に方形の孔が1ヶ所。	:燻銀。	両端欠損。 め橙色化した燻銀。	H023 H024 H025 F002 F003 H026 H027
第16図22 第16図23 第16図24 第16図25	図版5-55 図版5-56 図版5-57 図版5-58 図版5-59 図版5-60 図版5-61 図版5-62 図版番号	10 T 11 T 11 T 13 T 1 T 15 T 17 T 2 T 1 V F	Ⅱ 4層 遺構・帰	軒栈瓦 軒栈瓦 軒栈。 駅 場	? 軒平部 尼軒平部 鬼瓦 丸瓦 丸瓦 丸耳 北耳 上斗瓦 上斗瓦	(12)~(21) 瓦当長さ(123)、 瓦当長さ(134)、 現存長95 現存長15.0 現存長13.2 現存長10.3 現存長13.4 法量 (cm	幅(46)、厚含(1 編39、厚含(1 幅41、厚含、 、幅6.5、」 、幅12.2、 、幅9.5、 、幅15.0、 、幅12.5、	(12)~(1.6) (125)~(1.75) (1.5)~(1.77) 厚さ2.0 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4	角がある。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻銀。両端欠損。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻銀。両端欠損。 万様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。24より小さい。二次焼成のため橙色化した 周縁 文輝区を持たない平坦克当面の無文。瓦当台線は斜位となる。石上端の角切りは短い。二次抗 二次焼成のため橙色化。 裏面に櫛掻き接合剥落痕。 有段式。凹面に布目痕。 燻銀。 四面に布目痕。 燃網に円形の孔が1ヶ所。 端部に円形の孔が1ヶ所。 特 微	:燻銀。	両端欠損。 耐増色化した燻銀。 年 代	H 023 H 024 H 025 F 002 F 003 H 026 H 027
第16図22 第16図23 第16図24 第16図25	図版5-55 図版5-56 図版5-57 図版5-58 図版5-69 図版5-60 図版5-61 図版5-62 図版5-62	10 T 11 T 11 T 13 T 1 T 15 T 17 T 2 T 	Ⅱ 4層 遺構・原 P 1 周辺	軒栈互射栈及事件线。 事件线。	字軒平部 三軒平部 起東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東	(127~(21) 瓦当長さ(123)、 瓦当長さ(131)、 現存長9.5 現存長15.0 現存長13.2 現存長13.3 現存長13.4 法量 (cm 径2.4、厚さ	編(46)、厚さ編39、厚さ(1 編41、厚さ、幅6.5、 、幅12.2、 、幅9.5、 、幅15.0、 、幅12.5、 ・ 重 』	5(12)~(L6) 125)~(L75) (L5)~(L75) ほ(L5)~(L77) 厚さ2.0 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4	角がある。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻銀。両端欠損。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。24より小さい。二次焼成のため橙色化した 関齢、文様区を持たない平坦瓦当面の無文。瓦当右側線は斜位となる。石上端の角切りは短い、二次抗 二次焼成のため橙色化。 裏面に櫛掻き接合剥落痕。 有段式。凹面に布目痕。 燻銀。 凹面に布目痕。 端部に円形の孔が1ヶ所。	:燻銀。	両端欠損。 め橙色化した燻銀。	H023 H024 H025 F002 F003 H026 H027 登錄番号 N001
第16図22 第16図23 第16図24 第16図25	図版5-55 図版5-56 図版5-57 図版5-58 図版5-59 図版5-60 図版5-61 図版5-62 図版番号 図版4-13	10 T 11 T 11 T 13 T 1 T 15 T 17 T 2 T 	II 4層 遺構・原 P 1 周辺 IV 1下位	軒栈瓦车杆栈。 軒栈。 軒栈。 駅1 M 1 M M M M M M M M M M M M M M M M M	?軒平部 三十三年 東京 東京 東京 東京 東京 大京 七十瓦 七十瓦 七十瓦 七十瓦 七十瓦 七十瓦 七十瓦 七十瓦	(12)~(21) 瓦当县を(123)、 瓦当县を(123)、 瓦当县を(11.1)、 現存長95 現存長150 現存長13.2 現存長10.3 現存長13.4 法量(cm 径2.4、厚さ 径2.3、厚さ	編(46)、厚さ 編39、厚さ(1) 編41、厚さ 「幅6.5、」 「幅12.2、 「幅9.5、 「幅15.0、 「幅12.5、 「・幅12.5、 「・電11.5の。 「・電1	5(12)~(1.6) 125)~(1.75) (1.5)~(1.75) (1.5)~(1.77) 厚さ2.0 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4	角がある。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻娘。両端欠損。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻娘。両端欠損。 対様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。24より小さい。二次焼成のため橙色化した 関縁・文様区を持たない平坦瓦当面の無文。瓦当右側線は斜位となる。石上端の角切りは短い。二次射 一次焼成のため橙色化。 裏面に櫛掻き接合剥落痕。 有段式。凹面に布目痕。 燻螺。 凹面に布目痕。 燻螺。 凹面に布目痕。 端部に円形の孔が1ヶ所。 端部に下形の孔が1ヶ所。 特	:燻銀。	両端欠損。 砂橙色化した燻鎮。 年 代 古寛永 新寛永	H023 H024 H025 F002 F003 H026 H027 登錄番号 N001
第16図22 第16図23 第16図25 第16図25 挿図番号 第16図26	図版5-55 図版5-56 図版5-57 図版5-58 図版5-59 図版5-60 図版5-61 図版5-62 図版番号 図版4-13 図版4-14	10T 11T 11T 13T 1 T 15T 17T 2 T 1VF 11T 15T 15T	II 4層 遺構· P 1 周辺 IV 1下位 IV 1下位	軒栈瓦 軒栈五 軒栈。 小 小 工 下栈。	?軒平部 尼軒平部 鬼瓦 丸瓦 丸瓦 土丸瓦 土斗瓦 半年 電水通宝 寛水通宝宝	(13/~(21) 瓦普曼 (123)、 瓦普曼 (123)、 瓦普曼 (123)、 瓦普曼 (123)、 現存長 (13)、 現存長 150 現存長 150 現存長 132 現存長 134 法量 (cm 径 24、厚さ 径 23、厚さ	編(46)、厚さ 編839、厚さ(1) 編41、厚さ(1) 編12.2、幅12.2、幅15.0、幅12.5、1 幅15.0、1 幅12.5、1 10.9、重量 0.7、重量 0.8、重量 0.8、重量 10.8、重量 10.8。10.8、10.8、10.8、10.8、10.8、10.8、10.8、10.8、	5(12)~(1.6) 125)~(1.75) (1.5)~(1.75) (1.5)~(1.77) 厚さ2.0 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.6 ほうできる。	角がある。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻娘。両端欠損。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。24より小さい。二次焼成のため橙色化した 周縁文様区特たない平坦瓦当面の無文。瓦当右側線は斜位となる。在上端の角切りは短い。二次抗 て次焼成のため橙色化。 裏面に櫛掻き接合剥落痕。 有段式。凹面に布目痕。 燻銀。 凹面に布目痕。 ජ線。 凹面に布目痕。 横線。 端部に円形の孔が1ヶ所。 特 微 銅製。 銅製。 銅製。 の 文字不明。僅かに土が付着。	:燻銀。	両端欠損。 砂橙色化した燻銀。 年 代 古寛永	H023 H024 H025 F002 F003 H026 H027 登錄番号 N001 N002 N003
第16図22 第16図23 第16図24 第16図25 挿図番号 第16図26	図版5-55 図版5-56 図版5-57 図版5-58 図版5-59 図版5-60 図版5-61 図版5-62 図版番号 図版4-13	10 T 11 T 13 T 1 T 15 T 17 T 17 T 17 T 17 T 17 T 17 T 15 T 15 T 15 T 15 T	II 4層 遺構・原 P 1 周辺 IV 1下位	軒栈瓦 軒栈五 軒栈。 駅 場 W 1 層 ~2層 ~2層 ~2層	?軒平部 三十三年 東京 東京 東京 東京 東京 大京 七十瓦 七十瓦 七十瓦 七十瓦 七十瓦 七十瓦 七十瓦 七十瓦	(12)~(21) 瓦当县を(123)、 瓦当县を(123)、 瓦当县を(11.1)、 現存長95 現存長150 現存長13.2 現存長10.3 現存長13.4 法量(cm 径2.4、厚さ 径2.3、厚さ	幅(46)、厚含(16年)、原含(17年)、幅(12.2、18年)、18年12.2、18年15.0、18年15.0、18年15.0、19、重重量量0.7、重重量量月201、重量量月201、重量量月201、重量量月201、重量量月201、重量量	5(12)~(1.6) 125)~(1.75) (1.5)~(1.75) 厚さ2.0 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 厚さ2.4 屋さ2.4 屋さ2.4 屋さ2.4 屋さ2.4 屋さ2.4 屋さ2.4	角がある。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻娘。両端欠損。 文様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。著しい燻娘。両端欠損。 対様区形が花頭曲線状を呈するが、内部は無文。24より小さい。二次焼成のため橙色化した 関縁・文様区を持たない平坦瓦当面の無文。瓦当右側線は斜位となる。石上端の角切りは短い。二次射 一次焼成のため橙色化。 裏面に櫛掻き接合剥落痕。 有段式。凹面に布目痕。 燻螺。 凹面に布目痕。 燻螺。 凹面に布目痕。 端部に円形の孔が1ヶ所。 端部に下形の孔が1ヶ所。 特	:燻銀。	両端欠損。 砂橙色化した燻鎮。 年 代 古寛永 新寛永	H023 H024 H025 F002 F003 H026 H027 登錄番号 N001

第Ⅲ章 まとめ

今回の発掘調査は、『仙台城下絵図』(寛文4年 [1664] 以下「寛文絵図」と略す)から幕末の『安政補正改革仙府絵図』(安政3~6年 [1856~1859]:第3図 以下「安政絵図」と略す)・『慶応元年仙台城下図屛風』(慶応元年 [1865] 以下「慶応絵図」と略す)までの各近世絵図・絵画類によると(仙台市史編さん委員会 1997、金森・佐藤ほか 2001等)、仙台藩の重臣伊達安房(亘理伊達氏)邸跡と推定される地区を対象とする確認調査であった。調査の性格上、限られた範囲での部分的な遺構調査となったものの、本屋敷跡推定地で行われた初めての考古学的調査であり、遺跡の基本層序と調査区域全体に近世相当層が遺存することを確認し、絵図・絵画資料に描かれた武家屋敷に関わると見られる遺構・遺物が検出できたことは大きな成果であった。今回の調査対象区域に限れば、本遺跡の遺構残存状態は概ね良好と考えられる。以下に、今回の調査成果と問題点について述べてまとめとしたい。

まず、今回の調査によって基本層序としては現表土層から基盤礫層までを $I \sim K$ 層に区分することができた。この中で、近世相当と考えられる M 層は近代以降の大規模な攪乱を受けていたが、近〜現代に相当する M … M 層直下の比較的浅いレベルから残存していた。特に M 8 ・ M 11 ・ M 7 ・ M 8 年(1875)の公園開園までの土地利用や公園整備、櫻岡大神宮遷宮、立町小学校建設時の削平・改変の影響を考える必要がある。

調査によって発見された遺構で最も注目されるのは、11トレンチと16トレンチから検出された屋敷の一部と考え られる礎石である。一般的に、礎石建物跡は礎石を持たない建物跡と比べ規模や構造、性格を異にする建物であっ たと考えられている。検出された2基の礎石間は約5.4mを測り、その間隔はほぼ3間となることから同一建物跡 を構成する可能性がある(第17図)。しかも、今回の調査区域は約14,000㎡を測る三方を道路や神社の参道で画さ れた略長方形を呈した地割りとなるが(第 $1\sim3.5$ 図)、礎石列の方位はN-75.50-E、北辺に残されている旧 立町小学校の塀は $N-77.1^{\circ}-E$ を指し、3間の礎石列が地割りの北辺あるいは南辺とほぼ一致している(第5図A-A')。 また、この地割りは「安政絵図」(第3図) や「寛文絵図」にまで遡る各近世絵図に描かれた伊達安房邸の屋敷地 地割りともほぼ一致し、さらに現地形図と江戸中期の道を合成した図(仙台市史編さん委員会 2003:574・575頁)か らも現在の略長方形地割りが伊達安房邸屋敷地の地割りを概ね踏襲していることが読み取れる。従って、こうした 略長方形地割りの一辺にほぼ平行する3間の礎石列は、屋敷地の地割りに沿って建てられた同一建物跡の一部とも 考えることが可能となる。そして出土遺物による時期決定や前述した明治期の削平も考慮しなければならないが、 礎石の検出面はいずれも№層上面となっていることから、『文久二年仙台城下絵図』(文久2年 [1862] 以下「文久絵 図」と略す)や『明治元年現状仙台城市之図』(明治元年[1868]以下「明治絵図」と略す)、「慶応絵図」の絵図に描 かれた建物の一部であった可能性もあろう。これらの絵図・絵画資料に描かれた伊達安房邸には長方形屋敷地の形 状に軸を合わせた建物群が見られることから、11・16トレンチが位置する現グランド部に母屋と考えられる大形建 物が存在していた可能性が考えられる。

また、8トレンチより検出されたSD1も上述の地割りの一辺にほぼ平行する溝状遺構となっている。遺構軸は $N-14.5^\circ$ - Wを指し、その延長上が礎石列A-A'と90.4 $^\circ$ の角度で交わる(第5図B-B'・第17図左上)。このように、SD1は礎石列と同様に屋敷地の区画に沿って構築された遺構の可能性が高く、断面形が垂直に立ち上がることや堆積土中層に拳大~人頭大弱の円礫が多量に確認されたことを考慮すると、布堀の建物基礎であった可能性がある。

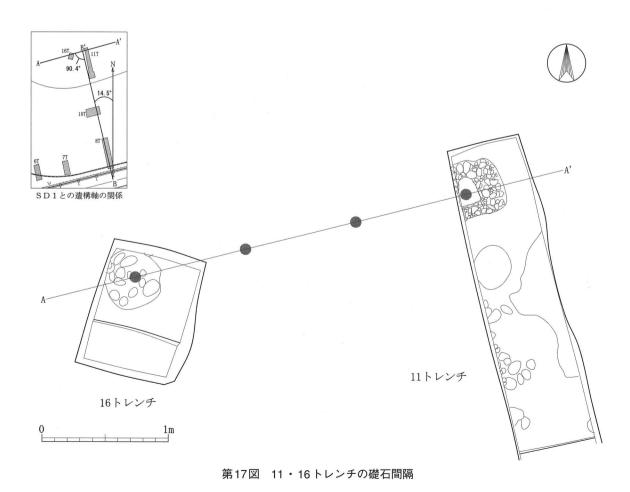
一方、15トレンチでは遺構のプランが確認され、その一部を掘り下げたが底面の検出までは至らなかった。しかし、その堆積土中からは黄色粘土質シルト主体の整地層と考えられる土層が確認された。また、 $4\cdot6\sim8\cdot9$ ・

10・17トレンチでも黄色粘土質シルトのブロックや版築状の層が観察されたが、これも15トレンチの黄色粘土質シルト主体層と同様な整地層の一部と考えられる。このことから、これらの調査区は15トレンチで検出されたようなプラン・整地内に設定された可能性もある。

次に出土遺物については、最も多く検出されたものは桟瓦を主体とする瓦類であった(第2表)。その中で13トレンチからは伊達氏の家紋の一つとなる三ッ引両の軒丸瓦片1点が出土し、1トレンチからは鬼瓦と考えられる小片1点が出土している。

調査当初、桟瓦は出土層位が近代以降で、戦災前の旧立町小学校が木造二階建て瓦葺き校舎だったことを写真資料から確認できたこともあり(渡辺監修 2001、渡邊・佐藤 2006、仙台市歴史民俗資料館 2007)、近世遺物との認識が無かったものである。しかし、著しい攪乱が見られたものの、近世に遡る可能性を残す17トレンチSK1からも大量の桟瓦が出土し、これらの瓦当文様や形式から近世瓦が含まれていることが判明した。また、これらの瓦には同笵瓦や布目の圧痕を持つ丸瓦も見られ、一方で同笵関係の判定基準となった木目痕の状態からはかなり使い込まれた笵による製作状況も窺われた。これらのことから、今後の出土例が増えれば同笵瓦間の製作時期差も抽出できるかもしれない。なお、軒桟瓦は仙台市域で発掘例が少ない江戸式が主体となり、東海式1点も含まれていた(金子2000・2007)。また、「文久絵図」や「慶応絵図」、「明治絵図」によると、瓦葺きは伊達安房邸だけではなく周辺の武家屋敷においても門と塀に描かれるのみで、母屋をはじめとする建物には認められない(千葉 1997)ことなどから、無文瓦当の軒桟瓦についても焼成や胎土・作出状態が他の軒桟瓦と共通することから報告することとした。家紋瓦や鬼瓦は門、桟瓦は塀に使われた可能性もあるだろう。

なお、本遺跡出土近代遺物の多くは仙台空襲に関連するが、これらの評価・活用も今後の期待としたい。



- (1) 写真1の遺跡遠景写真は発行年,発行所不明の絵はがき『仙臺市街全景』(中山豊所蔵)の一部を転載・加筆したものである。同様な構図(撮影場所は仙台城)の絵はがきは多く制作されたようで,現在刊行されている古い絵はがき写真集の中にも3種類ほど確認できるが,転載の絵はがきとは別写真であった(渡邊・佐藤2006・仙台市歴史民俗資料館2007)。年代は昭和10年頃とされ,転載した写真もこれまで知られている絵はがきと同時期のものとなっている。写真には昭和8年完成の斉藤報恩館と昭和13年に取り壊された鉄橋の大橋が写っていることから,この写真は1933~1938年の間に撮影されたものと判断される。また,仙台市戦災復興記念館と仙台市歴史民俗資料館にもこれと同一の絵はがきは収蔵されていず,発行年や発行所を確認することができなかった。歴史民俗博物館学芸員の佐藤雅也氏によれば,この絵はがきは昭和10年頃のもので間違いなく,当時仙台市内の小さな会社・印刷所で多く作られていたものの一つで現在は版権がどこにもないことから,原本の転載であれば所蔵者名を明記しておけば問題はないとのご教示をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。
- (2)『地番入仙臺市全圖大正十五年度最新版』は大正15年(1926) 5月5日発行・同年12月20日再版発行(中山豊所蔵)の一部を転載・加筆したものである。
- (3)『安政補正改革仙府絵図』は今野印刷 1994『絵図・地図で見る仙台』の一部を転載・加筆したものである。

引用·参考文献

金森安孝・佐藤 洋ほか 2001 『特別展図録 仙台城-しろ・まち・ひと-』仙台市博物館

金子 智 2000 「瓦から見た江戸と国元」『江戸遺跡研究会第13回大会 江戸と国元 [発表要旨]』江戸遺跡研究会 金子 智 2007 「江戸の瓦」『考古学ジャーナル』 № 553 ニュー・サイエンス社

川名源十郎 1926 『地番入仙臺市全圖大正十五年度最新版』川名文明堂

今野印刷 1994 『絵図・地図に見る仙台』

斎野裕彦·澁谷正信·北原正範 2005 『仙台市文化財調査報告書第289集 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査(1)概要報告書』仙台市教育委員会

佐藤 洋 2002 「仙台市内出土の陶磁器集成 - 近世 - 」『仙台市博物館調査研究報告』第22号 仙台市博物館

佐藤 洋 2004 「陶磁器の流通と消費」『仙台市史 通史編5 近世3』仙台市

仙台市史図録編纂委員会編 1975 『増補改訂版 目で見る仙台の歴史』宝文堂

仙台市史編さん委員会 1997 『仙台市史 資料編3 近世2城下町別冊』仙台市

仙台市史編さん委員会 2001 『仙台市史 通史編3 近世1』仙台市

仙台市史編さん委員会 2003 『仙台市史 通史編4 近世2』仙台市

仙台市史編さん委員会 2004 『仙台市史 通史編5 近世3』仙台市

仙台「市民の手で作る戦災の記録」の会編 1973 『仙台空襲』宝文堂

仙台「市民の手でつくる戦災の記録」の会・「仙台はフェニックス」編集委員会編編1995『仙台はフェニックスー戦中戦後の証言と聞書集-』宝文堂

仙台市歷史民俗資料館 2005 『仙台市歷史民俗資料館資料集第3冊』仙台市教育委員会 仙台市歷史民俗資料館 2007 『仙台市歷史民俗資料館資料集第5冊』仙台市教育委員会

千葉正樹 2003 「仙台の原景観と城下町計画」『仙台市史 通史編4 近世2』仙台市

吉岡一男ほか 1989 『仙台市百年のあゆみ』仙台市

渡邊慎也編 2006 『仙臺文化』第 4 号『仙臺文化』編集室

渡邊慎也・佐藤正実 2006 『絵はがきで綴る大正・昭和前期の仙臺』風の時編集部

渡辺信夫監修 2001 『目で見る 仙台の100年』郷土出版社

亘理町郷土資料館 2002 『伊達成実』

亘理町史編纂委員会 1990 『亘理小史』宮城県亘理郡亘理町

『仙臺市街全景』(絵はがき)

図 版





2. グラウンド部南側近景(北東から)



3. グラウンド部北側近景(南東から)



4. 1トレンチ全景 (南西から)



5. 2トレンチ全景 (南東から)



6. 3トレンチ全景 (南西から)

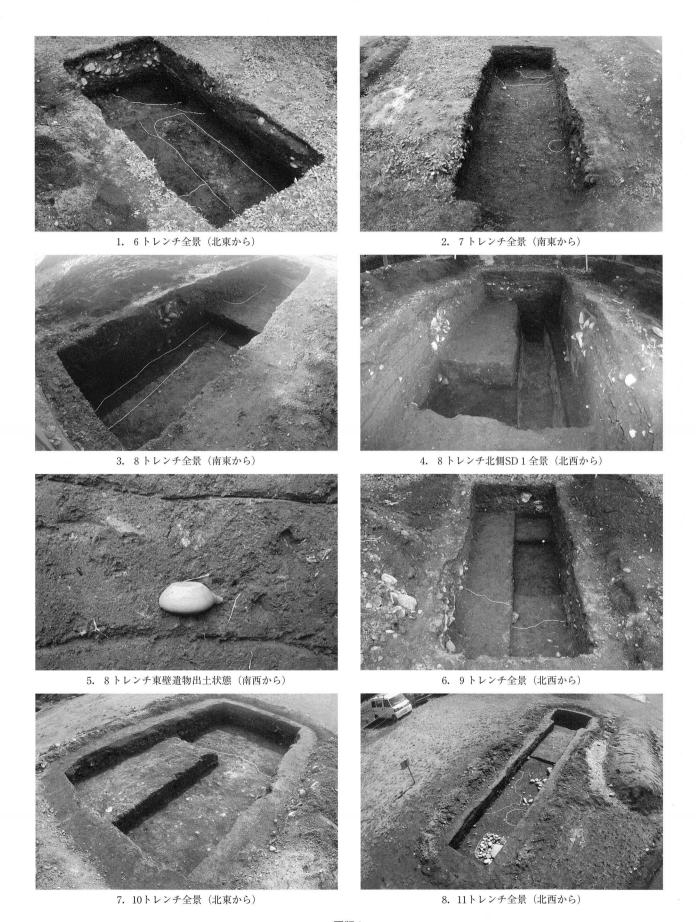


7. 4トレンチ全景 (北西から)



8. 5トレンチ全景(北東から)

図版 1



図版 2

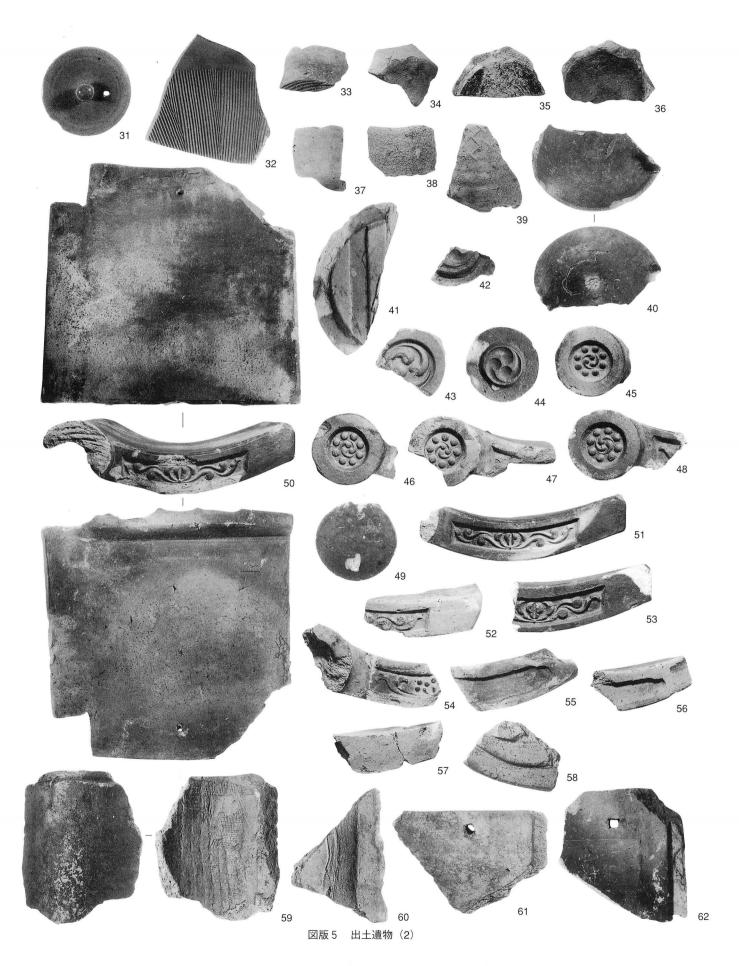


8. 17トレンチ全景 (北西から)

図版 3

7. 16トレンチ全景(北東から)





報告書抄録

ふりがな	さくらがおかこうえんレ	いせき									
書 名	桜ヶ岡公園遺跡										
副書名	第2次調査報告書								***************************************		
巻次			77.440						-		
シリーズ名	仙台市文化財調査	報告書									
シリーズ番号	第 318 集										
編著者名	廣瀬真理子・中山	豊									
編集機関	仙台市教育委員会	-						.,			
所 在 地	〒980-8761 宮城県仙台市青葉区国分町 3 丁目 7 番 1 号 TEL 022-214-8894										
発行年月日	2007年12月27日										
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	デ を 地	市町村	一ド遺跡番り	北緯	東	経	調査期間	調査面和	責 調 査 原 因		
まくらが おかこうえん 桜ケ 岡 公 園 近 跡	*** · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	04100	01562	38°	140 5: 48	_	2007. 08. 20	165 m²	西公園再整備事 業に伴う埋蔵文 化財の確認調査		
所収遺跡名	種 別	主なり	時 代	主な遺	構	Ė	な遺物		特 記 事 項		
桜ヶ岡公園遺跡	武家屋敷 近世 礎石建物跡 溝状遺構 整地跡					陶器、磁器、土師質土器、 瓦質土器、瓦類、金属製品					

仙台市文化財調查報告書第318集

桜 ヶ 岡 公 園 遺 跡

- 第 2 次調査報告書 -平成19年12月

発行 仙台市教育委員会 仙台市青葉区国分町3丁目7番1号 仙台市教育委員会文化財課 TEL 022-214-8894

印刷 平 電 子 印 刷 所 福島県いわき市平北白土字西ノ内13番地 TEL 0246-23-9051